

——え、貴方が却つては、たからはいかにも香氣相に一人でぶら／＼庭を歩いたり、ぼかんとして空をながめてゐらしたりする時、それが見えるのよ。それや、妾だけしか感じない事でせうけれど、そんな時、妾、ほんとに、貴方くらいさみしい感じのする方つてない氣がしますわ。」

「ふむ。さうかね。」先生は苦笑した。「それやまア、俺だつてあんまり本が賣れなかつたりすると、ちつたアガツカリするさ。たしかに張り合ひはぬけるからナ」と願を撫でながら外を向いて、「だが結局、世間的な淋しさなんて云ふものは謂はゞ人生の根本的なさみしさに比べれやまるで煙草の煙にも足りない淺薄なもんだからな。」

自分はふつと改まつた眼で先生を見直さずにはゐられなかつた。さうして、殊に妹さんの病氣のわるかつた時などにもちよい／＼その明るい樂天家らしい面持ちの中にちらと見出される事のある影を思ひ出した。そして奥さんの先生に對する愛と感じの鋭さとに感心し乍ら、一方その「煙草の煙みたいな」ものを以ては到底拭ひ去れるわけのない底のものを矢張りつひその空虚なものを以て慰めんとする奥さんの愛を女らしいと思はずにはゐられなかつた。

「さみしいと云ふ感じは、だが結局人間には必要なだらう。」と先生は或る時云つた。「それ

がなかつたら人間はあこがれと云ふものを持たず、従つて決して人生の深さを感じる事は出来ないだらう。その人の見る神の高さはその人の感じるさみしさの深さに比例するもんだ。」

が、又さうかと思ふと先生はへんな處に人知れぬ樂しみを嗅ぎ出す事の名人だつた。

ごろりと横になつてゐる枕許で梅の實がぼた、ぼた、と落ちると、「い、音だネ。」と云つて聽いてゐる。風呂を焚く煙、夕餉の飯を焚く竈の煙が北向きの窓からまはつてくると「い、匂ひだ」と云つて感心してゐる。

「昔、黄蘗は何かと云ふと三寶禮をする癖があつた。朝に、夕に、喜につけ、哀につけ、彼は南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、と唱へて何處へともなく禮拜をした。一僧怪しむで問ふて云ふに、佛も、法も、僧も、畢竟「我」以外のものにあらず、處にあらず、何に向つて何を求めるのかと、すると黄蘗は、不_レ求_レ佛、不_レ求_レ法、不_レ求_レ僧、而も禮拜斯くの如しと答へて、又スウと頭を下けた。

「その「而も」と云ふ處の中に人生無限の妙味はあるんだ。」と先生は云つた。

「自分の息子が馬鹿だからと云つてその子を憎くむ親があるか。悪い母親を持つて、その惡のために苦しみ、又憎くみもするからと云つて、それで母親に愛を失ひきる子があるか。人生だ

つて矢張りさうだ。人間は決して或る實感や、思想丈けで生きてるものぢやない。實感の前、思想の前に因縁と云ふものがある。そしてその因縁のための生に對する根本愛着と云ふものがある。而かもその根本愛着と云ふものが吾々生きもの、全感情の裏にあり、意志の根に存する處には又深い宇宙的理由があるんだ。

この世は正に火宅である。地上の半面は常に地獄である。だが青山白雲を見、花鳥風月を見て樂まず、家常茶飯の美にふれて喜ばない者があるか。人生の鍵は複雑な形をしてはゐない。極めて簡單明瞭である。しかも論理を超越してゐる。

狭隘、固陋な自己の論理の中にのみ生きて、一方無量な神智の大海に悠々遊ぶ事を知らぬ者。それは畢竟神を求めて神から遠ざかる氣の毒な片輪である。

おなじ海に生きるなら螺のやうに生きるよりは魚の如く生きむ哉である。」
或る時、人有つて、先生の道徳を訊いた。すると先生は「三和」と云ふ詩を出してその人に見せた。

「何、僕の道徳？」

それはいたつて簡單さ

竹澤游としては

出来るだけおだやかに親切に

向ふ三軒兩隣りの人と和し

人類の一員としては

出来るだけ勤勉忠實な仕事師として

人類と和し

物如、本體の我としては

出来るだけすなほに、ふうわりと

天地太源の生命と和す

結局それを實行するだけさ」

が、或る時又人から同じ問をうけて先生は答へた。

「自分が負ふ事が正當である荷は負ふ。自分の責任である義務は果す事を努める。だが個人に力に無理な事を義務とする必要はない。自己と云ふ人類の一員を不當に苦しめる事は、他人と云ふ人類の一員を不當になやます事と、人類の不滿に於て一様である。己れに甘くして他人に

嚴酷であると云ふ弱點を持つて生れた吾々は、その反對に他人に寛にして自己に嚴酷である事を以て道德の關の山とする低いレベルから、更に公正な階梯に一段高く立つ事が出来てもいい、他人に對すると同様自己にも無理を強ひるな。それは吾等を造つたもの、心ではない。吾等は一面に於て、もうたしかに原始的エゴイスト以上のものである。今頃になつてやつとこさと他人の價値に氣のついたものではない。」

「吾等は何も聖人君子を吾等に不可能な事をするがために偉いとは思はない。吾らの力に可能な事の最上を爲すが故にえらいと思ふのだ。子供を失つても涙一滴こぼさない杯と云ふ豪傑を吾等はもう格別尊敬もしなければ、痛いものを強ひて痛くないと感じやうとする事をえらいとも思はない。君に向つて、お前は今から五分間の中に否でも應でも死ぬ事になつてゐる。さアその覺悟をしろと運命が出て来て云ふとしたら、どうだ。勿論覺悟が出来てゐれば煩悶が少いだけ得である。だが、君はそんな無理なあきらめ方が是非出来なければならぬ「必要」はない。俺は最後迄どたばた反抗して死ぬと云つたつてそれでもいいのだ。その反抗のどたばたをぎりぎりのどんづまり迄押しつめきつた時、君は却つて肚が据はるだらう。

海に泳いで溺れる者は、潮に逆らつて無理やり岸に泳ぎつかんと漢搔くが故に疲れ果てるの

である。要領を得たものは怒と潮に乗じて潮に従ひ、潮の手の裏をかいて流れ乍ら流れを利用して却つて岸に着くのである。

生死の大海に遊ぶのもコツは一つである。運命を支配しきらうと云ふには一旦それに支配されきつて見るがいい。自然を精神に服従せしめるために先づ一旦精神をしてそれに従服せしめる。そして土呂の上に裸で放り出された赤ん坊がオイ／＼泣ける丈け泣き抜いた後で、ぼかんとして大空を見るやうに天地の因果を見るがいい。自ら高くする者は卑くめられ、自ら卑しくする者は高められんと云ふ天探女あまのうらなひ人情の理は又天地自然の理である。禪で大死一番、一旦死んで見ろと云ふのも蓋しこの事だらう。」

無理に我ん張るな

わるかつたと思つたら

すなほに悔ひ改めよ

わるござんしたと

そして神の度量の無限さにあやかれ

哀しい時、さみしい時

内に顧みてやましからず
しかも哀しみあふる、時は
泣け

母にはぐれた子のやうに

そしてかくれたる神の愛の深さをさとれ

だがうれしい時、心おどる時は

よろこべ、勇め、歌へ、おどれ

そして神の榮えを

ほめた、へよ

汝が造られし如く人間らしく

すなほなのが結局一番神のお氣に召す」

「肉體で同化せんとしてその肉體故に

同化出来なかつた處のものに

それを同化させなかつた精神故に

今度は同化する

そこに精神を肉體に宿した自然のたくみがある。」

或る時齒醫者に通つてゐる事を知らせた端書きの末に「お笑ひ草」として先生はこんな狂歌
を書いて來た。

引つこぬいて捨てん朽ち齒と思へどもぬかれる時は鬼の泣き面

苦が蟲をかみつぶしても後は樂なりと思ひし如くさつぱりとせり

七

しかし淋しい生活の中にもやはり誰かと訪問者はあつた。愛知が日本を去る以前からその頃
になつて頼と繁々顔を見せるやうになつたのは松宮だつた。中央劇場で日外逢つた時以來彼と
顔を合はせなかつた自分は、久しぶりにその鴨居につかへる程の背を見た時、苦笑を洩らさず
にはゐられなかつた。が、彼は自分を見ても唯その長い願で「暫らく」と一つ肯づいた丈けで

につこりともしなかつた。彼は決して苦笑と云ふものをしない男だつた。

衣紋竿を高く吊したやうなその風采をそのまゝに見るやうな此風變りな性質の男は、いづれ先生と何か話をし度くて態々東京から出かけてくるくせに、どう云ふ氣でやつてくるのか氣が知れないほど黙然としてゐる事が多かつた。従つて先生の方からばかり物の云ひ様もなかつた。そのくせ常人自身はそれで結構屈托もせず對面を楽しむでゐるらしい風だつた。さうかと思ふとどうかした拍子に彼は不意に饒舌家に約變して、彼が一時カナリ出鱈目な生活をしてゐた事と、今ではばつたりそれを廢めて、禪を嚙りはじめてゐる事を迄うちあけたりした。

「ちや、坐るんですね。」と先生が訊いた。

「え、坐ります。」

「鎌倉へでも行つてですか。」

「え、一度建長寺に行つた事はありましたが、何とか云ふ管長に野狐禪の臭味をどうも露骨に吹つかけてられて一度で懲りん／＼しちまひました。二度と行く勇氣はありません。」

「ちや誰にも就かずに、一人で公案を考へるんですか。」

「いや、僕のは全く自己流なんです。誰に就くでもなけりや、公案なんて何にも知りやませ

ん。しかし只朝起きると兎も角先づ坐つて見るんです。」

「と云ふと所謂無念無想に入るんですか。」

「まあさう云ふ事になりますね。何しろその日の仕事の事も、人との約束も、義理も、家の病人の事も何もかも一旦がらりと忘れちまふんですから。只さう云つても空論のやうに聞こえますが——、つまり一切「世」と云ふもの、事物から離脱して唯純粹な自我と天地と丈けになつて見るんです。いや、そんな相対的な存在さへ意識しない状態、つまり絶對境に自分をおいて見ると云つてもいいでせう。」

「それはしやうとすれば出来るんですか。」横から自分は訊いた。

「え、出来ますとも。何でもない事です。」と松宮はすました顔で答へた。「尤も心配事があつたり、急がしければ急がしい程その必要は感じられるわけですが、そんな時に坐つて見ると腹が据はる事は事實です。謂はゞ一日の足場を構へるやうなもので、しつかりと腰を据ゑて大地の上に立つた氣持ちです。どうにでもなるやうになれ。仕事も出来れば出来るでよし、出来なければ出来ないでよし、それこそ本來無一物なんだと思つちまふんです。さうすると別に何のい、事を考へると云ふわけでもないんですが、實にすが／＼しい軽い氣持ちになります。そん

な時にお袋などが私の名を呼んでふつとそこへ這入つて來たりすると實際びつくりしてしまします。「世」と云ふものがひよつこり出て來たやうな氣がして、自分がそれに屬してゐるもんだつて事を意識させられるんで。それからまあ一日の相對界に出て普通に働くんですが、それでもそんな風に一度腹を据ゑた足場から一日を出發させると、その一日は大變い、です。尤も本當の禪と云ふものはそんなぢやないかも知れませんが。」

スバリく敷島を喫かし乍ら松宮はさう云つた。

「どうも人の家へ來て無闇に禪定に入られちや此方は退屈だ。」

後で先生はこんな冗談を云つて笑つたが、それでも決して人の受け賣りでない松宮の實感を自分らは大いに面白いと感服し、且つ彼の獨特な風格に益々厚意を抱くやうになつた。

しかしこの風變りな主人公の家に出入する變人は獨り松宮のみではなかつた。自分らはよく例の八字髻のドクトルの物識りに似合はず、勇敢なほどの獨斷説にふつと顔を見合はせて了ふのだつた。

「まあざつと五百年位の壽命のあるものなら、人生五十と云ふ人間の實感結構それを永遠と呼ぶんですネ。」

まるで算盤ではじき出しでもしたかのやうにこんな事を眞面目に云ふこの變挺な科學者は又「或る種の人間は餘りに精神的に過ぎるとか、道德的に過ぎるとか云ふやうな事は決して云ひ得ない事ぢやないと私は思ひますね。」と云ふやうな説まで堂々と述べ立てるのだつた。彼はその例にセネカとか、エピクテートとか、聖フランシスとか云ふやうな名前を持ち出して、「どうもかう云つた人達は、それや無論偉い、必要な、尊敬すべき人達ですがネ。人達ですが、只人間と云ふもの、立ち場から單にその人として見るとどうもちつと一方に偏してゐる、——謂はば或る過渡期に於ける人類の或る本能の手先きに使はれすぎてゐるとも云つた感じが私にはどうもするんでしてね。と云ふのは唯その反對に藪醫者の私が肉體の要求に偏してゐるからだと云はれるかも知れませんがね。」

「ですがこの人間と云ふものが精神的に過ぎたり、道德的に過ぎたりするつて云ふやうな事は決して有り得る事ぢやない、つてトルストイは云つてゐますね。」と早速正直な春田が云つた。「さうく、そのトルストイなどがつまりその「過ぎる」方の仲間だと私は云ふんですよ。つまりさう云ふ人の説に對して私はさう感じるんです。」ドクトルは慌て、髻を撫でながら答へた。「勿論さう云つたからつて、私は何ももう既に出來上つちまつてゐるさう云ふ歴史的人物

の批評をしやうと云ふんぢやありません。出来上つちまつてゐる人間と云ふものは、出来上つちまつてゐる或る文化と同じで、それ〴〵動かせない價值と、感じとを持つてゐます。況んやさう云ふ尊敬すべき人達の反駁などを私はしやうと云ふんぢやないんです。私の云ふのはもつと未來に屬した一般的な、従つて抽象的な問題なんです。自分としてどう云ふ道を執るのが本當かと云ふ事なんです。」

つまりドクトルの説によると、現代に生れた我々は先祖のやつて來た事をもつと批判的に見るべき特權を有してゐる。人類があらゆる方面から萬遍なく要求を生かして成長するために、それ〴〵の過程として或る時代の代表者が拂つた犠牲を今日の我々が同様に拂ふ必要はない。それは馬鹿けてゐると云ふのである。たとへば我々の先祖は自業自滅から免れるために一方常に自分をいじめすぎなければならなかつた。この事は勿論生物の本性として己れを猫可愛がりにしすぎる事實の反證であつて、限りのない慾望の盲目さに驅られる果ての慘めさをつく〴〵嘗めた彼等は、その蹄係の誘惑に打ち克たんがために反動として、道徳と攝生との價值を知つたばかりでなく、禁慾主義者にさへなつた。彼等は一切の色界を否定し、色慾を斷念した以上更に求めて苦行をした。肉體にはわさ〴〵苦痛を與へ、頭には出来るだけ無理な難題を課した。

而も傑出した者は跋なりに一種の解脱者となつた。自分の内と外とに己れと仲間との運命を狂はず多くの「惡魔」を持つてゐる事に氣のついた彼等は、その文字通りの「惡魔」に負けない爲めに一方その位るにまで極端な反本能主義者、反自然主義者になる必要があつたのである。甘い彼等がうか〴〵と色界の色香にうつゝをぬかす事は實際見す〴〵「老象の泥に溺れる」如きものに相違なかつたのである。何となれば色界の法則にはさしづめな倫理的目的と云ふべきものなぞあるわけはなく、所謂神の攝理とか云ふものは事實有るには有るところが、それはもつと超越的な、隱密なものであるのに、眼先の美しきものは又善きものなるべしと勝手に信じてか、れば忽ち陷穽に陥る事必定だからである。それ故一方に追ひ〴〵科學主義なるものが發達して、色界の「惡魔」を「存在せぬ」と云ひ、「そんなものは誇張されたる人情の自己幻影に過ぎず」と眞面目くさつて否定すれば、他方の思想家達は到底安心してそれを承認する理由も餘裕もなかつたのである。――

「勿論さう云つたつて、私は我々の素質なり、本能なりが先祖の代のそれと別物になつたと云ふんぢやありません。」ドクトルは續けた。「游牧時代の人間が持つてゐたあらゆる馬鹿けた慾望や残忍性は今日の我々になほ依然と、いくらか必要と云ふ位の形で存在してゐるばかりか、

知識と想像力の發達によつてもつと濃厚に毛をかけられてゐます。ですから私は少しでも攝生と束縛とが今日の吾々に不必要になつた杯と云ふんぢやありません。いや、昔よりもつと一層複雑に必要となつて來たわけです。そして又吾々人間と云ふものは、よく出來たもので、決してその或る程度の束縛や努力を嫌やに思ふもんぢやありません。併し乍ら、思想の上に於ては我々はたしかに先祖が折角作つてくれた遺産を相続しなけれやならぬのです。つまり我々は先祖が馬鹿々々しい程丹念に計算し畢つた勘定を一々始めからやり直すやうな無駄な骨折りをしないで、先祖が吾々にのこしてくれた資産によつて、新しい事業の開拓に著手しなけれやならぬと思ふんです。先祖が血を流して拂つてくれた犠牲を我々は今更拂ふに及ばず、先祖が折角卒業して了つた事を再び習ふ必要はないんです。恰度あのそれ運動會でやるリレー・レースのやうなもんで……」ドクトルはこの大袈裟な譬へに氣がついた時大いに得意らしく髯を撫でた。

「吾々の先祖が力をつかひ果してへとくになつて了つた處から私達新時代の者は大いに澄澗たる新鮮なエネルギーをもつてその先きを走るべきだと思ふんです。それこそ先祖に對する吾々子孫の義務、恩返へしと云ふもんで、吾々にしたつてさうでせう。もし私達の子孫が結局私達の五里霧中で履んで來た餘計な廻はり道や、たわけたしくじりや、迷誤を同じやうにくり返

返へすにすぎないとしたら、ガツカリぢやありませんか。又さもないとしたら時代の變る事に何の意味がありません。」

「同感ですね。」先生は愉快相に合槌を打つた。「波が防波堤の一丈の高さまで届いたと云ふ事は、何も凡ての波が一つくそ迄上つたと云ふ事を意味する必要はありませんからね。一つの波が一度そこに届けば、波はそこ迄露らした事になるやうなもんで、先祖の卒業は取りも直さず人類の卒業と云ふ貴方の見方は私も同感です。勿論僕らは同じ人間として先祖達のやつた努力を矢張り或る程度迄はくり返へして、それを自分の體驗にしなくちやなりません、併しスタートの線は少しづつ、前進して行くんでなくちや困りますからね。」

「ですから現に前進してゐるんです。」ドクトルはなほもおしやべりを進めた。「我々は先祖の苦しむだお蔭けによつて、感覺とは何か、慾望とはどんなものか、現象とは如何なるものか、結局幸福とは何かと云ふ事を明細に知識して了つてゐるんです。よし概念的にもしろ兎も角知つて了つたんです。先祖が御苦勞さんにも一々こくめいな計算をして割り出した斷案を、吾々はこの相續財産によつて一ぺんに直觀して了ふ事が出来るんです。吾々は今更雷鳴りを神の瘡癩玉とも思はなければ、又自然の内に惡魔を認める宗教家を眞面目な皮肉を以て迷信家だと笑

ふ科學者に與みしません。兩方を理解する吾々はその何方よりも進んだものなんです。信
神家であつて、同時に自然科學者であり得る今日の吾々から見れば、基督の先祖を無理やりに
ダビデ王に結びつけずにはゐられなかつた昔の宗教家達が却つて物質的に見えます。奇蹟の信
仰だつてさうです。或る奇蹟は耶蘇の生涯を美術的にはしたかも知れませんが、信仰としては
却つてバイブルを物質化して、その神祕を弱めたとも云へるでせう。今時の人間だつたらたと
へもつと俗悪ではあるにしろ、一つの信仰の本尊を強めて金ピカな王様の子孫にして、そのた
めに有り難がるやうな事はしないでせう。と云ふのは即ち吾々がそれだけ物質主義に卒業した
からなんです。つまり物質に對して人類の精神はずつと餘裕が出来て来たからなんです。私は
今日の人間が昔よりずつと物質的になり下つて、精神は物質の壓迫の下に氣息奄々してゐる
と云ふ普通の常識を甚だ皮層な間違つた見方だと思ふもんですよ。たしかに吾々は昔の人間よ
りは物質的に見えます。なぜと云へば、その物質主義を受け容れる丈の餘裕、自信が、吾々
の精神にあるからなんです。」

「それはまつたく貴方の云ふ通りですよ。」先生はこのドクトルの説を大いに賛成した。「どう
せ精神的な者である吾々は今更どんな唯物主義をも科學主義をも、恐れたり、排斥したりする

必要はないものです。却つてそれをうけ入れて知悉する事によつて益々宇宙を支配してゐる一
つの精神的法則に對する知識を深めて行くでせう。吾々はどんなに科學的になつた處で宇宙の
神祕をあばき過ぎると云ふ事はあり得ませんし、又それで吾々の生命の根本目的と信仰とが低
級になる氣遣ひもありません。萬一ぐらつく事があるとしたら、僕らはその神の暗示に對して
又謙遜にすなほなる丈の事です。そしてそれによつてなほ深い意志を知つて行く事につと
める丈の事です。」

「人間の小を知る事は取りも直さず人間の大を知る事である。」と云ふのが元とから先生の説
だつた。「夜の泉」の中に先生はかう云つてゐる。

「我々は科學によつて自然に眼をむけたお蔭で自分の微小を知ると同時に、人間の偉大と名
譽とはどこに存し、どこに求むべきかと云ふ事を知つた。そしてそれを自分の精神的運命に見
出した我々は、自分が自信を持つ上に何もこれ以上に物質的運命の殊遇を要しない事を知つ
た。吾々は物質的には、他の蟲けら仲間同様、唯このじめくした地上に偶然にツイた生類で
あつて結構である。が、その蟲けらにはあのバスカルの名言の通り、己が蟲けらである事、己
以上のもの、價値ミを知り更にその最高價値である永遠な全體生命に内的につながらり得る力^{ポテンツ}

を持つてゐる。又吾々は科學によつて自分の小と宇宙の大を知ると同時に、自然が何等惡意のある「惡魔」でない事を知つた。七日間か、つて天地萬象と人類とを「無から發生させた」造物主エホバは否定されたが、その實科學の否定したものは神ではなくて、只その「人間性」である。一々「人間のために」警官のやうな眼を光らせてその行動を監視し、母親のやうにおせつかいを厄くその心配性な人情味である。即ち科學は唯吾等の信仰をより合理的な、靈的なものに深める役をつとめたにすぎない。かくて人間は己れに對する神の特別な恩寵に對して蟲のい、自惚れを抱くわけに行かなくなつたが、その代り神の「冷淡」を知る事によつて却つて自由な獨立性を得、それと共に責任も亦自覺された。神との距離の無限な遠さが分るに従つて、それは又何よりも吾らに近いものになつた。なぜならそれは天上の紫雲の玉座に在ますやうなものではなくつても、と個性を超越した内的な遍在者である事が分つたからである。」

こゝまで讀んだ時自分は先生が自然科學に對して協同的好感を持つ理由が明かになつた。しかし神についての見解はこの詩的表現だけではまだどうも散漫に思はれた。自分は更にこの點について、いつか先生の意見を糺明して見度ひと考へた。

竹澤先生と虚空

京都にゐる間に一度先生を呼んで見度ひと豫ね／＼思つてゐた自分は、私かにある講演會を企らんで見た事があつた。自分の好きな二三の顔を揃へたその會によつて、そんな事でもして此方から餘儀なくおびき出す機會を作らない限り、自分の方から思ひ立つてわざ／＼遊びに出かけてくるなぞと云ふ事は一寸實行し相にもないあの先生を自分は迎へる事が出来るばかりでなく、又それで旅行費の一部位は供給する事が出来やうと思へたからだつた。ところでその自分には一舉兩得に思へた計劃を心當りの者に話して見ると、他の顔ぶれに對しては誰も異議はなかつたが、その一人に先生を加へる段になると、反對を申し出る者もなかつた代りに、又誰一人それはい、ですネと賛成する者のなかつたのも意外な程であつた。「竹澤さん……と云ふと、たしか牧師さんぢやなかつたですか。」聞いた事がある名だと云ふやうに、首をかしげ乍らこんな出鱈目を云ひ出す者があるかと思ふと、てんでその名前すら知らない上は手のあ

るのには道がに自分も嘔然たらざるを得なかつた。尤も中には博識家らしく「夜の泉」つて本がありますネ、などと識つた顔をする者もゐるにはゐるが、さうかと云つて讀んでゐるわけでは毛頭なかつた。しかもそれが皆堂々たる大學の辯論部委員とか、校友會雜誌の編輯人とか云ふ代表的面々なのである。要するに反對者のないのは當然であつた。自分はガツカリするより、不快を感じるより、おかしくなつた。そして同時に氣がぬけて了つた。

ところが氣がぬけた自分が或る鬱陶しい雨の日に、温つたまりに風呂へ行かうとして下宿を出やうとすると、丁度出會ひ頭に郵便屋が先生の端書を自分に突きつけた。それには近日中に多分家族をつれて、遊び旁々郷里の方へ話をしに行く事になつた。遙々Mくんだりまで下手な話をしに出かけるのも御苦勞さんすぎるが、何分断りにくい人の所望ではあり、又しよつ中家にばかりゐる奥さんにも一度郷里の春の美しさを見せてやりたくもあるもので、久しぶりに奮發するつもりである。「その節にはいづれ往復に御地に立ち寄つて、かねての宿望を實現するのを楽しみにしてゐますが、折あしく恰度君の急がしい時にぶつかるので自然君の勉強を妨害する結果になり相なのが残念です。」かう書いた後に「辰子も大の京都好きなので、方々の寺や繪などを見せて連れて行き度く思つてゐますが、之は都合でどうなるかまだ分りません。——」

と添へ認めてあつた。

先生の郷里である山陰のM市に或る金持ちの息子で、以前から先生の原稿や書を高く買ふ珍しい奇篤家があると云ふ事は豫ね々聞いてはゐた。唯金を呉れると云ふのも不躰になるんでそんなものを買ふのかも知れないと云ふ話だつた。竹澤と云ふ名前すら知らない者の多い世間に、一方そんな熱心な篤篤家が一人でもゐると思ふ事は自分には愉快だつた。「隠くれた處にあ、云ふ知己がぼつ／＼ゐてくれる事を考へると、仕事と云ふものは眞面目なもんだとつくづく思ふね。」と先生は云つてゐた。そのめづらしく眞面目な讀者が、折もあれ自分が講演會を計劃した時に恰度同じ事を發起して、ゆくりなくも先生を迎へる自分の望みを果してくれる事になつたのを自分は奇縁に感じた。

蛇の目傘をさしたま、その端書を読んだ自分はすぐ二階の室へ引き返へすと、決して「妨害」などはされない、それにしては自分は秀才すぎる事を書いて、一日も早い事を鶴首して待つてゐる。その時には停車場へ迎へに出るから電報をくれるやうに、と云ふ返事を先生と奥さんとへ二本認めると、すぐ又その端書を懐ろにして雨の表へ出た。

毎日電報がくるのを心待ちにし乍ら五日程がすぎた。櫻にはまだ半月程も間があるのにどこ

へ案内しやうなどと考へ乍ら、自分はつい都おどりを観てにこ／＼してゐる奥さんの顔を想像したりしてゐた。すると或る晩實に妙な夢を見た。

何でも例の通り下宿の窓に横向きに腰をかけて、春の町をながめてゐると、忽ち前の大文字と東山の間から黒雲があらはれて、夕立ちのやうな豪雨を降らし乍ら音すさまじく此方へやつてくるのが見えた。と、あはて、走り出す往き來の人々の間に、下の方から一臺のホロ俣が一直線に此方へ向つて急いでくるのが眼にとまつた。それが何だか自分の處へくる人のやうな気がした。先生かも知らんと自分は思つた。しかし先生なら奥さん達も同伴の筈だから、一臺のわけはない。誰だらうと思つてゐる中に、その俣は案の如く下宿の前へ來て轆をおろした。どう云ふ人物がそのホロの中からあらはれるか。すつかり好奇心を起した自分はなほそこに腰をかけたまゝ、大きな眼で俣夫がホロのボタンを下から順々に外して行くのをじつと見睨つてゐた。と、一番先きに自分の眸に映つたものは恐ろしく綺麗な女の下駄だつた。眼の醒めるやうな淺みどりの鼻緒をつけたその下駄の次ぎに自分の眼をおどろかしたものは、これは又夢に見る花嫁の衣裳かと夢の中に思つたほど絢爛な裾模様であつた。たしかにそれは花嫁のいで立ちである。が、そこまで見惚れた時、その花嫁装束の本尊は大々とした籠甲の櫛笄をさしたした

たるやうな島田と一緒にその美しい裾をくづして、音もなく俣の外に降り立つた。その姿を一眼見た自分はアツと云つて飛び上つた。それは妹さんだつたのである。

どうしたのかそれから先きを自分はくはしく記憶してゐない。自分があはて、迎へに降りたのか、それともそれより早く妹さんは自分の部屋に上つて來られたのか、否それがむさ苦しい自分の下宿の部屋かそれともどこか奥深い殿中の一室なのか、それさへ判然しなかつた。兎も角恐ろしく明るく恐ろしく廣い部屋の中で、自分はその綺羅をつくした妹さんとさし向ひに、何の話か嘗てなく泌々話話を交はした幸福な美しい感じ丈けをあり／＼とおぼえてゐる。

眼が覺めた時の自分は、てつきり戀をしてゐる時の感情状態——その蠱惑的な甘まいなやましさを味はつてゐた。自分は實に妙な氣持ちで自分の戀愛當時を思ひ起すと同時に、前夜の夢の云ひやうもなく絢爛な記憶を頭の中にくり返へしては獨り樂しみ乍ら、どうしてあんな途徹もない夢を見たものかと考へた。自分は妹さんを戀してゐるのであらうか。深い無意識のうち

に思つてゐたのであらうか。あの妹さんに對する自分の氣持ちはたしかに厚意以上のものではあるにしろ、それはあんな夢をまで見るやうな性質と度合ひとのものであつたのか。さう思ふと急に何だか羞かしいやうな氣がして來て、うすら寒い蒲團の中で獨り顔を赭らめた。

教室に出て自分は矢張りぼんやりしてゐた。教師が横文字を書くボードに昨夜の夢をくり返へし見てゐた。そして何だか留守の間に電報が來てゐるやうな氣がして、四時頃歸つて來て見ると、電報の代りに又先生から端書きが來てゐた。

「——實は三日ほど前から辰子が急にわるくなつたのです。原因は流感に罹つたため、俄かにどうと云ふ憂ひもあるまいと醫者は云つてゐますが、未だに九度以上の熱がついてゐるの、東京から醫者を呼んだりしてゐる状態で、兎も角旅行は當分見合はせにしました。折角の事でしたが、右とりあへず。」

自分は何かにドシンと胸を突かれたやうな氣がした。そしてその端書きを見つめたま、又夢ではないかと疑つた。嘗てなく一つの夢に拘泥した自分も「夢のお告げ」を擔つぐ程に迷信家ではなかつたが、いかに無意味な偶然とは云へ、それは餘りにも氣味のわるい皮肉な暗合であつた。この端書を追つかけて電報がくる事を想像して見ると、自分はとても安閑としてその恐ろしい報知を待ちうけてゐる氣にはなれなかつた。その端書きを手にするまであれほど待ちに待つてゐた電報。それが今では何よりも來てくれるなど祈るものになつた。あの不便な場所に、あの無人で、いざと云ふ際に唯一人の男である先生はどうするか。自分の頭には寒い真夜中の

田圃道を一人提灯をぶら下けて、町のドクトルの處へ急ぐ先生の姿がちらつた。わきには春田もゐる事はゐる。あの變竹林なドクトルもゐないよりはましであらう。だが自分はそれらの人の心づくしに一任して、遙かに恢復を祈つてゐるだけで落ちついてゐられる自信はなかつた。結局その夜の夜行で自分は見舞ひに行く事に決心した。

二

向ふに着いた時にはもう萬事は休してゐる——さう云ふ事でなければいゝが、と念じつゝ、汽車に乗つた自分の不安は、幸にしてはづれてゐた。わざ／＼來てくれたのかとおどろいて恐縮がり乍ら自分を迎へた先生は

「どうもおどろかしてすまなかつた。實は僕も少しあはてたんで……。」と先づ自分に安心を與へつゝ、書齋へ通したが、例の如く淡はい微笑を浮べながらさう云ふ先生の面持ちは、その呑氣らしい言葉の樂觀性を些しも宿してゐなかつた。もつと見るに忍びない顔つきを見る事を覺悟の上で來た自分は、それでもその毎ものやうな穏やかな顔を見た最初ホツとしたが、更に落ちついてその穏やかな表面の裏に湛えられてゐる深い悲痛と、その悲痛な天命に對する淋しい

覺悟とを讀むだ時、胸が一杯になつた。

「で、今は落ちついてらつしやるんですか。」とぼけながらやつと之を訊いた。

「まあ、一寸。」人の顔を正視する事を避けるやうに、庭の方へばかり視線を向け乍ら先生は答へた。「要するに時間の問題らしいけれど。」

嘗てこんなに弱つた先生を感じを見た事なかつた自分は、唯溜息を吐いて黙つてゐた。

「しかし……」とその溜息を聞いたからか、先生は笑顔をこつちへ向けた。「どうせ早晚かう云ふ時が来るつて事は分つちやるたんだし、當人は勿論、僕らも覺悟はしてるが、しかしさうは云つたつて壽命は分らないさ。案外まだこれで長く持ちこたへないもんでもないぜ。心臓さへマイらなれや。」

「もう御自分ぢやあきらめてらつしやるんですか。」

「それがどうも——あ、云ふ病人てものはいざいよく重態になつてくると不思議に希望を持つてくるもんでネ。それがつまり口にも悲觀を洩らすのが怖はくなつたその絶望状態を意識したくないからさうなるのか、或は、はたの者を苦しめ度くないために悲觀を表はさないのか、それとも本當に一種の香氣心理になるやうに出來たものなのか、そこが明瞭でないが、何れにし

ても結局は自覺して諦らめてるにや相違ないんだ。頭は實にはつきりしてるんだからね。何もかも十々意識し乍ら、而も正々堂々と大手を振つてやつてくる運命の手を逃けるわけに行かない。その意識が實に残酷だ。」

先生の顔は又曇つた。

妹さんの健康は此冬、近來になく出來がよかつた。それがつい一週間程前に、少し氣分のすぐれないを押して活け花の教授に出かけた歸りに風邪を引きこんだ。その風邪と云ふのが運わるく悪性の流感だつた。咯血も何もしなかつたが、忽ちひどい肺炎を起して、熱のために元々弱く弱い心臓をすつかり弱らした。體質さへ強ければ抵抗出來ない事はないのだが、何分にも脈のわるいのが一番心配だ、と東京から來た博士は云つて、二度目に來診した時には結局匙を投げたらしい形で歸つたこの話だつた。

自分が行つた時、先生は恰度一丁ほど離れたその別居の方から戻つて來られた處で、奥さんはまだ其方へ行つてをられた。留守宅では若い春田の細君が淋しがつてゐる小さい人達のお相手になつてゐた。手が少くてお困りでせうと云ふと

「いや、困るところか、みんな實によくしてくれるのには恐縮してるんだ。活花をあれに教は

つてゐる近所のお嬢さんだの、隣の百姓家のお内儀さんだの、春田君の叔父さんだのつて、實に思ひがけない人が實に思ひがけない親切を盡してくれるんで、僕など殆んど役に立ちやうもない位だ。尤もあいつは一體人から厚意を持たれる人間ぢやあるが。――」

却つて兄さんは居どころが分らないために通知する事も出来ずにゐるやうなわけだ、と先生は自分の問ひに答へたが、と云つて別にそれを咎めてゐる氣色は見えなかつた。

見舞ひ旁々何か役に立ちたいと思つて京都から出かけて来た自分は、唯空しく溜息を吐いてゐる以外に何の働きも出来ず、却つてそこにゐる丈ヶ厄介をかけるにすぎないので、一二の用を引きうけて一旦東京へ歸り、二日程経て又新村と一緒に小田原へ行つて見た。妹さんの熱は前より下がつてゐるが、脈は依然として思はしくなかつた。

「なあにまだ分るもんですか。あれでもうちつと食事さへお進みになりや私はまだく望みを失ひはしません。」とドクトルは云つた。「人間の命つてものは強いやうで脆いもんですが、又脆いやうで強いもんですからナ。」

「まつたく強いもんだ。骨と皮ばかりのあの體にどうしてまだあんな抵抗力があるのか實に不思議な氣がする。」かう先生も云つた。

しかし奥さんはその食事が二三日めつきり行かなくなつた事、衰弱がますます眼に見えて来た事を話して、「妾、あのお禮が實にいやなんです。妾がお膳を持つて行つたり、蒲團を替へてあげたりなんかするたんびに、あの大きなお眼でにつこり會釋なさりながら、ほんとに濟みませんわね、くつて、一々あやまるやうにお禮被仰るんでしょ。それが何だか只それだけのお禮ぢやなくつて、いろく世話になつたつて被仰るやうな意味に聞こえるんですもの。妾もうほんとに……」さう云つてぐつと唇を噛み乍ら、「ねえ、どうしても駄目なんでせうか。」と、とうく泣き出してはれた。

それに誘はれて急に涙のこみ上げて来た自分は、とても先生の顔を見る勇氣はなかつた。

「今から泣く馬鹿があるか。あいつが死ぬとはとても思へない。」そのくせ自分もおろく聲でさう云ひ乍ら、「皆こつちへばかり来ちまつてはいけないだらう。」と奥さんを起させた。

「この顔でい、でせうか。」と、赧い臉を拭つて起ち乍ら奥さんは先生の方をむいて

「貴方も、もつと行つてお上げ遊ばせよ。別に何とも被仰りはしないけど、貴方をそれや眼でさがしてらつしやるんですから。」

その晩、少しおちついたところで先生はかう云つた。

「あいつはたしかに僕に何か云つてもらひ度がつてゐる。何かしらお坐なりの慰めでない、本當の安心の力になるやうなどつしりした覺悟の言葉を云はせ度がつてゐる。あのぼつちりした眼にはその深い希望が僕にはあり／＼と讀めるんだ。僕とても出来ればそれを與へる事をどんなにのぞんでゐるか知れないんだ。どうも矢張り平凡なごまかし慰めを云つて逃げてくる事しか出来ない。力もないが、勇氣もないんだ。自分の職掌柄耻しいわけだし、兄貴としても不親切な話と思ふが、どうも面と向ふとつい意氣地が無くなつちまつて。……向ふから何とか云つて突つ込んで訊かれてもしない限り……」

「お兄さんだから出来んなれないんでせう。他人だつたら却つて何とか被仰り易いでせうが。」と自分は口を切つた。「ですが今更あらためてそんな事を被仰らなくつても辰子さんは今迄の長い御一緒の生活で、自然先生の人生觀なり信仰なりを呑み込んでゐらつしやるでせう。いつの間にか……」

「それや、さうだ。……兄妹きょうだいとか、夫婦とか云ふやうな親しすぎる間だに、却つてさう云ふ眞面目な話は差し向ひに出来にくいもんだが、又強めてしなくても唯氣持ちの上丈けの事なら無言の中に随分驚くほど理解しちまふもんだが、かう云ふ思想上の事柄になると矢つ張り唯愛だけぢ

や充分には了解出来ないもんだから……。尤もあいつは僕の書くものは残らず讀んぢやゐるがね。その僕の書く思想なり、信仰なりと云ふものが、——かうして實際にぶつかつて見ると、どうもまだ力が足りない、本當に出来上つてゐないと云ふ實感になつて來てね……」

「それはどうしてもさう云ふ氣はなざるもんでせうが、ですがそれは力の問題と云ふより、先生の宗教の性質が云はゞさう云ふ實用的信仰とは少し質たちがちがふんぢやないでせうか。」

「さう。僕は自分としては或る宗教を持たない人間ではない。事實僕獨特の信仰に依つて生きちやゐる。だがそれは殊にあ、云ふ女の心を直きに満足させるやうな向きには出来てゐない。云つて見ればどうしても唯明らめてくれと云ふやうな薄情らしい弱い言葉になる。さうかき云つて禪坊主の出来損なり見たいなそら／＼しい事も云へず、——僕は來世を信じてはゐないからね。」

沈痛不安なこの機にのぞんで、先生は獨り靜かに默想を凝らし度ひ風に見えた。けれども亦、もし同情ある吾々親身の者がこの場合が場合である故に自然かう云ふ大きな題目に話を觸れさせやうとするならば、先生はそれを避けなければかりでなく、むしろ獨りである事の暗い淋しさをまぎらす上からも進んでそれを迎へるらしくも見えた。ところでこの來世云々と云ふ最

後の一句がへんに耳新しく自分の耳にひいた時、それまで黙々と俯向いてゐた新村がひよつこり顔を擡げて、果して來世は存在しないものだらうか、と云ふ問ひをきりだした。

「來世を願つたり、現世を厭つたりしてゐる間のあの世です。この世です。願つたり、厭つたりする意志がこの體を離れると同時に安息したはつた時、來世は無意味になり、極樂も用がなくなるでせう。」先生はすまして答へた。

「現世で幸福であつた人、少くとも不運でなかつた人はそれで瞑する事が出来ると思ひますけれど、この世で不幸すぎた靈はそれではどうしても、浮ばれない氣がしやしませんか。」

「それはしますよ、無論。人情としては、先生は横をむいたま、願を撫でた。「つまりさう云ふ浮ばれないやうな運命の多いこの世だからこそ來世を求める實感にもなるわけなんです。」

「ぢや、いくらそれでは浮ばれない、不合理だと云つたところで、それは結局人間の側だけの知つた慾で、神には何の關係もないと被仰るんで……」新村はますます熱心になつた。

「いや、關係がないのではない、あるにはあるんだが、さう云ふ意味では、つまり現世がかうだからかうなくちやならん、さう云ふやうな人間の勘定に對しては神は全く冷淡な、有つて無きが如きものだとは僕は考へるんです。だからたゞへば佛教のやうに、神と云ふものを土臺認めずに、

すべては人間の「心」の作用、「心」の生み出す現象として、萬法唯心、心外無別法とする無神の宗教も立派に成立してゐるんです。」

「實際もしこの幸福と不死とを求めて、悲惨と滅亡とを悩やむ心を僕らが唯いたづらに有つてゐるだけで、この世の生活の中に自分を内的に得度し得る立命の道がどこにも無いとしたら、それこそ來世の無いと云ふ事はまつたく不合理な事にちがひありません。——」

森とした座の中で先生は更にかう云つた。

「たしかにその道は與へられてゐるにはあります。現に自分を立派に救ひきつた幸福者はわりに少くないんですから。」新村はすつすりハムブルな研究生の調子になりきつて云つた。「ですが——僕は一體自分が弱い故か、どうしても神と云ふものを無いものとして、淋しくも心細くもなく平氣で生きてゐられる人達を見るに、まづその性格の強さにおどろかずにゐられない者ですが、——苟も神を立てるとすれば、僕はその本質をどうしても最高善、最大理性と見ないでは無意味に思へるんです。つまりそれは理性であるから正義であり、攝理であり、善であり、又愛であるんです。そして又さう見なければそれは只無常な運命と選ぶ處がなくなつて了ふんですから、僕らが理想の本體とする價值はありません。それなのに大多數の被造物にとつては

その天命を完ふする道が内的にも外的にも全然此の世では途絶えてゐるのも同然だ云ふ残酷な事實は、只人情としてのぞましくないばかりでなく、本來その生存者をつくつた神の本質や計劃と矛盾したものに思へてくるんです。苟も神を有るとする以上、そんな風に作られてる筈はないと思へるんです。——それはまだ人間に力がないからだ云へばそれまでですが、力がないつて事は罪ぢやありませんから……」

「勿論それは人間の罪ぢやありませんが、又人間をつくつた者の罪も云へないでせう。」しばらく無言でゐた先生は口を開いた。「つまりそこが因縁なんで、僕らは何も云つてもその因縁の中に解脱を現じ得るやうに神が仕組んでくれた可能性をもつて満足しなければやならない、と云ふのが僕の見方なんです。——」

「つまり、神の愛にも程度があると被仰るんですか。」

「さう。程度があると云へば云へませう。神は自分が現にそ、いでゐる愛の上にそのそ、がれてゐる者の状態と要求次第に應じて、せがまれ放題にいくらでも恩恵を附け足すと云ふ事を全くしないから。その意味に於ての神の愛には程度があるどころか、むしろ神位被造物の要求に耳を持たない強情な者はないと云つてもいいでせう。しかもそれでゐる神の愛は無敵なんだから面白いんです。」先生の口調は斷言的になつた。「なぜ云つて、神は自分の氣に入るやうなやり方によつて従順に自分の心をうけ入れ、注意深くそれに耳を傾け、それを感じ、それと一つになるものに對しては決して自分の意中をとさすと云ふ事がなく、隠す事がなく、いくらでも無盡蔵に愛をうちあけて盡きる事がないからです。神の愛が無敵だと云ふのはさう云ふ意味ですよ。」

「誰が神の愛を、こんなに不足な筈はないと云つてこぼす事が當然である程、完全にそれを試めしきつた者があるか。何百萬年と云ふ時間を通じて生ききるやうにしてあるらしいその神からの授かりもの、「幸福の可能性」を吾等は果して生かしきつて見た上で、さうこぼしてゐるのか。——かう自分に省み、努力する者は、どんな不平家よりもたしかに利口である。事實彼は遂に神の愛の無限を知るであらう。」

神のたくみをすべて内面から見やうとするかう云ふ見地から、先生は神が自分の計劃の仕上げをするに云ふやうなそんな場所——來世を認めてるやう筈がなかつた。「人間は自分の性質から物には時間の制約があるとしたか實感出来ないもんだから、神にもそれがあるやうに想像して了ふが、空間的に存在を絶してゐる神は、又時間と云ふものを知りやうがない。従つて

神の計劃は、必ず或る時間を通さずには仕上げられない人間の計劃とは全く別の概念をもつて見なければならぬ。即ち神の計劃は、「企て」であつて、同時に完成してゐる。進歩と云ふ經程もなければ完成と云ふ終局もない永恆な神のいとなみは「企て」た時に完成してゐると云つてもいいので、その意味に於て神は正に萬能なる者である。こゝに星あれと云ふ時、そこに星を現出する事が出来るんです。」しかし乍らその神のたくみは、この地上では人間と云ふ——吾等の知つてゐる範圍では——この宇宙でそれを感じする唯一の機關を通じて二重にはたらくだけ、他の星の上では果たされ方を異にするとは云へ、神は自分の一番の奥の手、最深の意圖を人間に完成實現せしめ度む目的で事更に人間を作つたものかどうか、それは何とも分る事ではない。「蓋し、僕に云はせれば、神は何も人間に己れを知つて貰ふ事を「要し」ない。己れのもくろみの遂行者として人間を「要し」ない。たしかにそれは人間がそれを探る事によつて己れのたくみの一端を吾等の知るがまゝ、に任せてはゐる。又人間が自分の解釋で勝手に神の意志ときめこんだ考へを我武者羅に遂行して行く事に逆らひもしない。けれどもよし人間がもつと無能力に作られて、もつと盲目な自然の奴隷にすぎないとしたところが、神は依然として自分が振舞ひ度ひやうに振舞ひ、生き度ひやうに生きて行く上に何の痛痒も感じないだらう。

些しでも感じると思ふのは自惚れすぎると云ふものである。」

三

先生がふと洩らした來世と云ふ一語は、圖らずも新村の穿鑿によつてこんな風に自分が豫ねて觸れ度く思つてゐた要點にまで話を導く緒となつた。自分は先生の神觀をさぐる上にこの又とない好機をこゝで打ち切つて、のがして了ふのがいかにも残念であつた。然しこの非常の際に餘りしつこくつかまへて話に嵌まりきる事も遠慮をしなければやなるまいと考へて、先生の顔を見た。先生は話の合間に時々ぱつたり口を噤んだ。それが相手の言葉に耳を傾けてゐるのか、それとも何かいやな注進の不意打ちを喰らひはしないかその方に注意を向けてゐるのか、それが分らなかつた。けれども話に倦んで疲れたらしい氣色は一向見えなかつた。自分は安心して一息つくと、又次のやうに切り出して見た。

「いつか先生は、「隣人に對する愛のための愛」と云ふやうな愛は、人間にしかない獨創物で、神にも宇宙にもそんなものはないと被仰つた事がありましたね。」

「え、だつてそれはさうだらうぢやありませんか。神は「他人」を持つてゐない。だからし

て實は自己と云ふ意識をも持つてゐないのです。神に自己と云ふものがあるとするれば神は「他」に對する相對的存在に限定されて普遍性がなくなる。それと同時に神は一切自己、一切は神の自己だとも云へる。だからして神はエゴイストであつて、同時に愛である事が出来るんです。意志であつて、同時に法則である事が出来るんです。先生はすらく答へた。「己れの慾するまゝに振舞ふ事が直ちに攝理であり、己れを愛する事がそのまゝ、他愛であると云ふ理想を完全に實現してゐる、又實現し得る者は唯神のみです。つまり神にあつては自他と云ふものがないから自他が全く調和してゐるんで、又自他が完全に調和してゐるから自他がないんです。」

先生の神觀は大體いつもかう云つた謂はゞ形而上的認識の立ち場から出發する。従つてそれは「福祉と不死とを求める人間本然の願望」からさしづめの必要として生れたものでもなければ、又この世界に於ける萬法の秩序を統制する正義なる原理、道德律の根據として、同時に又一切の人間的努力を意義づける目標とし、理想として、道德的要請からそれを立する立ち場でもない。「現代に生れた自然人は神を認める上に於て、先祖よりもずつと遅れるのが自然である。吾等は決してそれを墮落と感ずるに及ばない。神は吾らの日常生活に表だつて安つぱく必要とされる事をだん／＼要しなくなるからである。」先生はさう云つた。むしろ先生の立ち場はさう

云ふ人間本然の願望としての要求や、道德的要請の歸結としての意志を離れて、純粹に唯ありのまゝな自然のうちにそのありのまゝな精神をすなほに洞觀する事によつて、おのづからそこに生ける法則、「意志であつて同時に攝理である法則」を見出した結果に他ならない。その結果の信仰が先生の實生活にとつて事實上缺くべからざるものとなり、又生活の道德的根據に符合した事はむしろ必然なる偶然と見て差支へない。それ故ある牧師が先生の宗教觀を評して、「あれは信仰ではない。一種の科學だ。」と云つた事はあながち間違つた非難ではない。確にそれは「神を小さく限定する事によつて神にだしぬかれる危険」が少ない代りに、この人間と云ふものに恰度相應した信仰の對象としては、前の二者の立ち場に比べて餘りに超越的にすぎ、純粹な宗教的情緒も、實際的信仰とに人を引き込む力に於て稀薄に見える觀があるからである。

尤も先生は滅多に「神」と云ふ言葉を口にし度がない人だつた。先生がその言葉を會話や感想の中にぼつ／＼挟むやうになつたのは自分がつき合ひだしてからも一二年たつての後だつた。さうしてそんな時でも一口に「神」と云つて了へば世話のないやうな場合でも先生はなるべくその言葉を避けて、「僕らを産むだ本源の生命」とか、「靈である生命」とか時には只「生命」とさへ云つたりした。そんな風だつたから何の迫られた必要も實感もなくせに

只濫りに神と云ふ「えら相な言葉」を口にして見たがる者がある時、先生は苦がくしげに、「なんでそんな一體有るか無いか分りもしないもの、事を君は強ひて問題にしたがるんだ。」と云ふやうな顔つきをした。しかしそのために先生の云ふ神とは畢竟自然とか運命とか云ふもの、象徴の別名にすぎなく思はれて、特に人間が神として仰ぐ意義のないもの、やうな氣がする事が折々あつた。が、それなら先生の宗教は結局一の宇宙觀であつて、實際の信仰に於ては無神に等しいと云はれた處で先生は平然として「それならそれでいゝ。」と答へるのみであらう。素より神を信ずるか信じないか、そんな名義は先生にとつてどうでもいゝ事だつたにちがひない。「僕は、人格的な、所謂勸善懲惡の神を拜むやうな信者達から見れば實際無神徒なんだらうから。」と自分でも云つてゐた。

「昔僕は或る有名な牧師から神の實在を證明された事があつた。その牧師は決して心にもない事を喋つてゐたのではなかつた。しかし僕には何の感じもなかつた。只空な言葉が耳にひやく丈けだつた。さうして今から數年前まで僕は神と云ふ言葉を口にするそらくしさに堪えなかつた。又僕は自分で見得ないものを強ひて信じるやうにならうとも心がけなかつた。けれども只心をすなほにして自分の進む方に自由に精進してゐる間にか僕はふつとそれを感じ

じるやうになつて了つた。——なに、それはちつとも珍らしいものではない。子供の時から臆ろけに感じてゐた處のものだつたのだ。——そして今では萬有引力や地動説を信じるのと同じ確かさを以てはつきりそれを「在る」と云へる。だから僕はそれを口にしてもう少しも空虚を感じない。」先生はさう云つた。

「僕は唯法則としての神を——自然のうちに生きる法としての神を信ずる。孔子はその法則を「天」と曰ひ、老子は「道」と曰つた。印度人は又それを「梵」と曰ひ、希臘人は「ロゴス」と曰つた。それは實に歴々として永恒無邊に生きる法則であり、洋々たる大生命であり、絶對に不可拘束なる自由意志であり、又測量すべからざる思想である。一切はこのイデアから生じ、このロゴスに歸する。何となればそのみ眞の生命であつて、生命は一つしかないからである。」「神とは畢竟この法則、このイデアを更に強く高調して、絶對意志として人格的に觀じたるもの、謂に他ならない。故に、「太初にロゴスあり。ロゴスは神と與にあり。」と云ふ言葉は眞である。」「吾等はこの實在なる法則を強ひて神と呼ぶ必要はない。本當に生きくゝと體感さへするならばそれを「無」と呼んだつて、「神」と云ふのと同じである。だが基督の示す「父なる神」が孔子の「天」や老子の「道」よりも更に剴切に、更に強く吾等の胸にひやくの

は、素より彼の實感の生き／＼した絶大な力には依るが、又意志として人格的に現はされたものが人間には一番リアリスチックに受けとり易いからである。」

話は綿々として盡きなかつた。又盡きる筈もなかつた。自分は少しぼんやりした。そして叩けば叩くに應じていくらでも反響して盡きない先生の感想の豊富さに今更おどろいた。あんな呑氣相なぼんやりした顔をしていつの間にあんな經驗を積むでるのだらうと思つた。先生は又少しそは／＼しだした。新村は黙つてゐた。臺所では八角時計がゆつくり九時を報じるのが大きく聞こえた。

「まだわりに早いですね。一つお茶を入れて來ませうか。」

かう云つて自分が起ち上つた時だつた。ふつと電氣が消えた。

四

「停電でせうか。」

と、お茶を入れに起つた自分はそのまゝ、手さぐりに臺所に行つて見た。外から月のさ、ない處はどこもまつくらだつた。自分は女中のつけてくれた手燭をもつて戻つて來た。先生は「一

す。」とそれをうけこつて、小さい人達の寢間の様子を見廻はつてくると、「いやな風が吹くネ。どうせ君達は泊つて行つてもいゝんでせう。」と云つた。實際強くはないがいやに生温い春らしい風が雨戸をガタ／＼云はせてゐた。恰度學校はもう休みになる時だつた。で、そのまゝ、ずつとこつちに尻をおもつける事にした自分はその晩も強ひて東京へ歸る必要はなかつた。

「それで安心した。——何だかどうも氣になる。僕は一寸失敬してあつちの様子を見てくるから、菓子でも食つて待つてくれ給へな。ちき歸つてくるから。——」

そは／＼した風にさう云ひ乍ら自分で手さぐりに茶の間から栗饅頭の折をもつて來た先生は、番茶を入れさせに女中を呼んだ。そんなに構つてくれる事を辭し乍ら、そこ迄一緒に歩きませう。丁度月もいゝから、と云ふと

「さうだね。こんなまつくらな家の中でぼんやり電氣のつくのを待つてゐるより、明るい外へ出て歩いた方がよつぽど氣がきいてゐるね。もうそんなに寒くもなし。——」

さう云つて三人が玄關に立つた時だつた。自分達はその格子の外にぬつと立つてゐる一人の男の姿にびつくりした。

皎々たる月の光りを背にうけてそこに佇立してゐるその男の黒い輪廓を見た瞬間、自分は何

者か一寸ドキッとした。次ぎに自分はそれを先生の兄さんかと思つた。が、それは兄さんではなく、乞食のやうな襦袢を着た見知らぬ男だつた。

「御免下さい。突然夜中に罷り出まして甚だ失禮ですが、……」ちやんとした言葉つかひのわりにギョチない調子で男は云つた。「貴方は竹澤先生で……」

「え、私、竹澤です。……」被かけたインバネスを手にしたまゝ、先生は答へた。

男は朝鮮の者だと云つた。そして此方に稼ぎに出てきて、鐵道の工夫になつてゐる間に怪我をして、労働が出来なくなつた。郷里に歸り度ひと思ふが旅費もない。實に途方に暮れてゐる。——さう云つた。

蠟燭の光りに見ると、なるほど一方の脚は脛から先きがブツツリ断たれて、泥だらけの切れがきたなく巻きついてゐた。しかし松葉杖をついてゐるそのがつしりした猪頭の軀つきと、剛鐵のやうな色をした髻蓬々たる面相とは獯猛と云ふよりむしろ一種仙骨を帯びて見えるほど無氣味にも奇怪な感じであつた。殊にその洞のやうに深く窪んだ底にらん／＼と異様にか／＼やく兩の眼に到つてはどう見ても到底そんな惨めな廢人の顔にくつついてゐるべき代物とは見えなかつた。何の事はない、それはあの繪に見る鐵拐仙人をさながらの風貌と云へば一番適切な形容

容である。あの體ミ、あの顔つきとのどこからあんな哀れつばい聲が出るのかと思ふと、それが又一層無氣味な感じとなつて、此方の出やうによつてはどんな惡鬼然たる凄聲に變るかと思はれた。

「實は今病人があるんで、そこへ行かなければならないんですが、——」と先生は口籠るやうに「さう云ふ御用なら……どうです。……そこまで一緒に歩きながらお話するとしたら。」

「さうですか。……」

うまく断はられたと取つたらしく不服げに云つて、男は空嘯くやうに月の方を見た。横から見るしやくれた獅子鼻の下に恐ろしく厚い唇が重なつて突き出てゐた。

その間に先生は一寸奥へ行くと、すぐ引き返へして來たが

「ちや、君達はやつぱり一寸待つてゐてもらふかな。」さうして新村が何とか耳に嘯くと、「なに、い、よ。」と云つて、そのまゝ、風の吹く月夜の中にそのへんな跛の男と並んで出て行つた。

先生が歸つて來るのはそれから一時間ほど間があつた。その間新村と自分とは兩つの大きな坊主頭の影ん坊子を壁に向き合はせて座つてゐた。電氣は中々來なかつた。元と／＼暗く打ち沈んだ心地に誘はれ勝ちなこの機會に、馬鹿に大きな問題に打ち込んで、氣味のわるいほど高

い無邊虛空に氣持ちを引きずり揚げられたところでバツと電氣を消され、丁度又その揚げ句、まるで何かの氣に呼び寄せられでもしたかの如く、飄然と玄關に来て立つてゐたかの乞食風體の異形の男の眼に睨まれた自分は、しばらくの間へんに寒い悪夢に似た不安と闘ひ乍ら心の落ちつきを保つ事に努力した。そして實際哀れな者には相違ないしろ、どんな出鱈目を云つてゐるのか知れたものではないあの凄惨な朝鮮人から、人の好い先生がどんな迷惑を蒙らされてゐるはしないかと、それも氣になつた。

が、新村は更にそんな事に懸念を拂ふには熱心すぎた。自分は立てた兩膝を抱へるやうにしてまだ何かむつとり考へ込んでゐる此青年の綺麗な横顔を見ながら、理論家であると思つてゐた彼がいつの間にか信仰的になり、彼を理論家と認めてゐた自分の方が今では却つて、その點認識論的な學究の態度を持してゐる事を一寸へんに思つた。

——先生の話を聞くと、自分はいつでもそのもの、感じ方と考へ方との獨特な自由さに感心する。自分の考へ方はどうも因はれ易く、型に嵌まる癖がある。彼はまたこんな事を云つて頭をひねりながら

「どうも僕にはまだ先生の被仰る神は……あ、伺ふと實際そんなものなんだらうとは思へて來

ますが……どうも根がセンチメンタルな甘まい性分に出來てゐる故か、あんまり大きすぎて、實際の信仰の對象としては親しみにくい氣がして、ぴつたり來るとは行きませんが……やつぱりもう少し人類本位に「人類の良心」と云ふやうに卑近にやさしく見ておいた方が實感的になつて來ますが……。しかし僕は先生が神を單なる氣ま、なエゴイストと云ふ風に見てゐらつしやるやうに誤解してゐたもんですから、今夜その誤解がとけた事は非常にうれしい氣がします。實際神がエゴイストであつて同時に愛である。なぜなら一切が神のエゴであつて、そのエゴは又絶對な法則であるから、所謂善惡の相對を絶した善だ、つて云ふ事が僕にはやつと分つた氣がします。——」

やつと晴れ々とした顔つきを見せて新村がかう言つたその時だつた。

「人間の神に對する愛は、以つて神が己れ自らを愛する無限の愛の一部だ。」と云つたスピノザの言葉が突如として自分の頭にもひらめいた。そして思はず「なるほど！」とつぶやいて膝を叩いた時、ガラリと云ふ格子戸をあける音がして

「どうも失禮致しました。」とさも疲れたらしい奥さんの聲と一緒に「どうもお待ちどう。」と先生が這入つて來た。

どんな顔色で戻つて來られるかと、内々それを見る事を案じてゐた自分は、その尋常な聲を聞くと同時に明りが點いたやうにホツとした。で、お變りありませんでしたか、と訊くと、

「あ、わりに元氣で……いろいろ繪の話などをしてネ。熱も低いし、氣分もいい、らしい。」
先生はさう云つて坐はり乍ら

「あの分ならひよつとすると、實際あのドクトルの云ふやうに、まだ匙を擲けたもんでもないかも知れない。自分でもそんな氣がする故か、今夜はいつになくへんな事を云ひ出してネ。あのそら、京都の教王護國寺に十二天の繪があるだらう。なんでもたしか藤原時代の畫家の畫いたものだ。あの中の水天の複製を見ながら、「こんな明るい顔になれたらどんなにすがすがしいでせう。」なんて、しきりに感じたやうに云つて……。實際あれやい、繪だがネ。」

さうして何よりも妹さんを慰めるものは繪だ。明日は又春田の叔父さんから「一つ「審美大觀」か「國華」を借りて來てやらう。寢乍ら見るのには「國華」の方がいいだらうが、病氣が病氣だから一寸借りにくいかな。」などと獨り言のやうに云はれた。

「あの鐵拐仙人はどうしました。」と訊くと

「あ、あれか。なるほど……」さう云つて笑ひ出し乍ら、「なに、見かけほど凄こい奴でもな

さ相だつたよ。少しばかり金を渡して歸つてもらつたが、時々あ、云ふ手合ひは、どうして僕の名を知つてるものかやつてくるよ。中にはどうも圖々しい奴がゐて、一度金をやつても二度目に斷はるこ、臆面もなく人の悪口を吐き出してネ。君は貴族の思想家だと云ふが、今の世の中に勞働もせずにブルジョア然と寄生蟲になつてゐるのが氣がヒケるもんだから、そのテレ隠しに態々あんなきたない子供のおむつや、腰卷の洗濯を玄關先きに晒らして見せて、その貧乏世帯じみた幕の後しろに隠れて自分を胡魔化してゐるんだらう。なんて恐ろしく辛辣に啖呵を切つてネ。……」

「は。馬鹿に察しがよすぎるんですね。どつちが寄生蟲だ。」

自分達は笑つた。が、先生は「それやさうと……先刻は思はず神様の事をかれこれ饒舌りすぎた氣がするが……」と氣になるらしく云つて、神の事を云ひ出すとキリがないが、誰でも自分の内に何かしら「神に對する意識」をそれ／＼の感じ方で意識する事は出来るものだ。が、いざそれを言葉に現はさうとするが否や神は逃けて了ふ。それはその瞬間に人はその到底不可能な事を急に覺るからだ。けれども神に對する見方と云ふものはその人の全思想の根柢になつて、その考へ方を決定し、支配する。だからそれは出來得るだけ正しいものである事が大事である。全

く根本的に神觀を異にする人とは話がしにくい。——そんな意味の事をボツボツ話された。

「ですが、正しさを目ざすとは云つても、それは全然認識を超えたものですから、——要するに主觀的なものではないんでせうか。」最後に新村がかう云つた。

「それや勿論、結局は主觀的なものです。神の本質とか、たくみとか云ふものは、僕らのこの小さな頭では素より一部の一部も正確に「解る」とは云へないでせう。又「解る」必要もないのかもしれませんが。だからぎり／＼のどんづまりに行きやどうせ「解り」はしないんだから、人間は結局自分の主觀々々でめい／＼腑に落ちるやうに勝手に神を見立て、安心立命して行きやそれで文句はない。來世を信する者は信するの勝手であり、又それを信じないで、只その同じ願ひをこの現世に——永久に理想と現實とが對比するこの地上に——實現しようとする努力し生きるところに生存の意味を見出すの勝手である。恐らく兩方共人間として正當な道であつて、又どつちに行つたところで所詮神の計劃が神の意志どほりに行はれて行く結果は同じである。——まあかう云つておいてもいゝんでせう。つまるところはね。」

翌朝自分達が眼を覺ました時には、先生はもう書齋で何か書きものをしてゐた。さうして自分達が奥さんと一緒に飯を畢つたところへ來てかう話した。

「ゆふべは君があんな事を云つたもんだから 本當に鐵拐仙人の夢を見て了つた。尤も顔や風つきはそつくりあの朝鮮人なんだがね。どこからと云ふ事もなく僕の部屋へふらりとやつて來て立つてゐるんだ。僕はつきりあの朝鮮人が味をしめて 又何かねだり方をしにやつて來たものと思つて、何の用かと訊くと、お前こそ何の用で俺を呼んだんだと云ふ。どうも容子が少しへんなんで、一體お前は誰かと訊ねると、俺は鐵拐仙人だと云ふのさ。」

「へえ、面白いですね。そして何か議論でもなすつたんですか。」

「議論ちやアないが、大いに問答をやつたね。實は今朝床の中でそれを想ひ出して見ると、簡單のやうだが案外面白い對話なんで、今それを書いて見たところなんだ。どうせ夢の中の思想だから理屈としちやア少しアテにならない處もあるがネ。」

自分達はその原稿を拜見させてもらへませんかと云つた。そして先生が笑ひ乍ら持つて來られた原稿は次のやうな珍文であつた。

「余一夜夢ニ一風狂ノ來訪ニ遇フ。風貌怪異形容跋惡ニシテ而モ尋常ノ相ニ非ズ。宛ラ雲霧ヲ喫シテ生ケル仙者ニ似タリ。余固ヨリ彼ノ何人ナルヤヲ知ラズ。誰ナルカヲ問フ。

彼答テ曰ク「鐵拐仙人也。」

余大ニ驚キ重ネテ問フ。「汝那邊ヨリ來レル。」

答テ「神人ノ間ヨリ來ル。」ト曰フ。

「神人ノ間トハ奈何ナル處ゾ。」

彼莞爾トシテ答ヘズ。長嘯シテ蒼穹ヲ指サスノミ。乃チ又問フ。

「彼處ハ虚空ニ非ズヤ。」

「然リ。虚空也。」

「虚空トハ之レ空明ノ處ナル乎。」

「時ニ空明也。時ニ晦冥也。雲霧ノ去來スル處ナレバ也。」

「何者カソノ雲霧ヲ到ラシメ、又去ラシムル。」

答ヘテ曰ク「風神也。」

余聊カ憤然タリ。乃チ詰ツテ問フ。

「汝風神ヲ知レリヤ。」

仙人又阿々大笑シテ曰ク

「吾曷ゾ彼ヲ知ラズシテ可ナランヤ。彼ハ我主虚空ノ王ナルヲ。」

是ニ於テ余ハ鋒先ヲ轉ジテ、更ニ斯ノ如ク問フ。

「汝始メ神人ノ間ヨリ來ルト曰ヘリ。然ラバ神ハ即チ虚空ノ上天ニ在ル者ニ非ズヤ。」

「然リ。コノ地ヨリ仰グ時ハ彼正サニ風神ノ上ニアリ。然レドモ吾嘗テ一巨星ノ山岳ヨリ彼ノ遙カ風神ノ下ニ睡レル姿ヲ俯瞰シタル事アリ。」

余ハ益々「此奴」ト思ヒタリ。乃チ焦燥シテ又問ヘリ。

「彼モシ風神ノ意ヲ御シ能ハズトセバ、彼ハ萬能ノ主ニ非ズ。汝敢ヘテ彼ヲ萬能者ナラズト曰フヤ。」

仙人又哄笑シテ答ヘテ曰ク。

「我が意ハ彼ノ意ニ非ズ。彼ノ意又固ヨリ我が意ニ非ズ。汝如何ニシテ吾ガ能ク彼ノ萬能ナルヤ否ヤヲ計リ得ルト思フヤ。彼ノ意中固ヨリ風神無ク、風神ノ意中又彼無キニ似タリ。風神ノ雲霧ヲ呼び、雷雨ヲ拂フ。人固ヨリ之ヲ留ムル能ハズ、拭フ能ハズトスルモ、夫レ曷ゾカノ神ノ與カリ知ル處ゾ。」

茲ニ到ツテ余ハ漸ク心氣豁然タルヲ覺ユ。乃チ容ヲ改メ更ニ乞フニ教ユル事詳ラカナラン事ヲ以テス。

「咄。發スル勿レ。更ニ陋小ナル人間ノ愚問。吾ハ復タ夫ノ悠大ナル魂魄ノ遊樂スル處。吾ガ師老君ノ吾ヲ待テ爾虛空ニ還ラザルベカラズ。已矣。已矣。」

掌ヲ拂ヒテ言未ダ畢ラザルニ彼ハ一大嘯ト共ニ己ガ實相ナル魂ヲ宇宙ニ吐ケリ。其音聲ノ如シ。忽チニシテ上空ニ消逸ス。跡ニ形骸ヲ尋ヌレバ即チ一片ノ落葉憂々トシテ我書房ノ中ニ舞フアルノミ。」

五

「私には又何だか分らなくなりました。」新村はそれを讀んだ後でかう云つた。

「だから夢だと云つたぢやありませんか。それや理窟ぢやない。唯感じなんです。そんなものに拘泥する事はありませんよ。」先生は笑つて答へた。

しかし自分にはそれが唯偶然の夢にすぎないとは思へなかつた。やはり先生の常住の世界觀なり、神觀なりの中にその虛空觀があるのだと思へた。さうして先生がよく「縁」と云ふ言葉をつかふのが、その虛空に當るやうな氣がした。

尤も先生はじつとしてゐるやうで絶えず動いてゐる人だつた。そしてへんに進んで行く人だ

つた。多くの人が發達が止まり固まる一方の年齢になつて、先生の主觀はなほすく／＼と若木のやうに伸びて行く一方だつた。始めて自分が逢つた當時の先生と、今の先生とを比較して見ると、當然の事ではあるが、その思想の進歩はたしかに顯著である。そして思想の進歩は勿論萬端に於ける進歩であつた。たとへば神についての見方でも先生は明らかにいく段かの變化を經てゐる。素より先生は最初から舊約にあらはれてゐるやうな「人類的な神」の見方には反對者であつた。「もしこの世界を神が現實の「縁」を通さずに、唯道德的原理と正義とをのみ通じて支配する處と見るならば、吾等の眼前にあるこの無常なる部分の自然にはいかなる場所を與へたらよいのか。もしこの世を神と道德的原理とのみが支配しきつてゐるならば諸行は無常ではない筈である。この點に於て神さへ運命には處を與へざるを得ざるものと見た印度の神話は合理的である。」かう云ふ見解から、丁度太陽が唯地球の爲めにのみ照つてゐるのでなく、地上から見れば無駄な空間へ、地球の反對の側に向つても平等に、——唯太陽が太陽であるが故に——その光りと熱とを放射してゐる如くに、神は何はさておき己れ自らの爲めに生存し、己れの一部として、子として、人類その他の衆生に普ねく愛（有機的連絡）を持つてはゐるが、それはどこ迄も「自己愛の反照としての愛」、「自愛の一部」であつて、「生類を愛するが

爲めに己れを愛するのではない」から、そこに生じ得る調和は、勿論「在る」事は確實であるが、生類の側から見れば竟に或る程度迄のもの、即ち「縁」のもの、運命次第のものと言ふ事になる。「縁」が不運ならば、いかなる善因も善果に遭ふ事能はず。それ故「正しき世界とは善なる因（徳）が、必ず善なる果（福祉）に遭ふやう縁が合理的になつた世界、否、最早そのやうな「縁」と云ふものが存在しない世界である。」――

かくて一種の深い「諦らめ」と云ふものを、――苟も生をこの世に享けたるもの、「絶對に必要」なる覺悟として――先生は夙にその人生觀の根柢においてゐた。「人間は神が在る如くある事を以て満足しなければならぬ。否でも應でも。」と云つた。

だが、斯くの如き見解は、明らかに神を以て簡單に正善そのものである全智全愛の審判者と見、「人類の良心」と見、もしくは單に主我的な暴君と見る人間的な見方からすれば、遙かに合理的にして宏大なる見方であるとは云へ、なほ一種の自己^{エゴ}を神に認めてゐるものであつて、「神は自他と云ふ意識を持たず、同時に一切は神の自己なり。」と云ふ見方と矛盾するものになりはしないか。それは又「縁」とか「運命」とか云ふもの、獨立に存在する餘地をこの世界に認める事によつて神人の間に或る「隙き間」を承認する事になり、茲でも亦、神の普遍性と

云ふ觀念と撞着する事になりはしないか？

この點についての先生の答へはかうである。

「僕らはだん／＼齡を取りながら、次第に自然と同化して行く事によつて神の概念を深め、擴大して行く。僕らは善惡正邪と云ふやうな人類的意識の外に、只本當の自然さ、（すべての不自然に對する自然）と云ふもの、中に無心にひたつてゐる安らかさの中に、又それを感じるやうになる。そして神は道義人倫の上にあふれ出る。けれども僕らは何と云つても個體である性質上、どうしても實感としては神と自分との間に對立を感じ、無限の隔りを感じずにはゐられない。時にそれを自分の内に、又孤獨な自分の傍に生々感じる事はあつても、それは又忽ちにして遠遠の彼方へ飛び去つて了ふ。そして僕らは又空虚になり、淋しがる。之れ人間の對神的運命は徹頭徹尾パッシヴなものであつて、僕らはそのパッシヴな受働に於いて、神を無限に近くし、普遍的なる實在と感ずる事は出来るけれども、人間の方からアクティヴに神に働きかけ、神に注文する事の絶對に出来ない點は全く石ころと同然だからである。僕らはパッシヴに神を愛として、靈として感ずる處から、アクティヴな氣持ちにうつる時、神は忽ちにして無限に遙かなる因業なエゴイストに思へて来る。」

先生は學者として徒らに實感本位な態度を取らうとはしなかつた。「之は私の實感です。」と云つたところで先生は「それが何だ。」と云ふ顔をした。同時にどんなに冷靜に理論を談ずる時にも必ず確乎たる根柢の實感から足を浮かす事がなかつた。それ故神について云ふ事も時に應じていく分まち／＼である事を免れなかつた。そしてさう云ふまち／＼さが時に人間の理智から矛盾するやうに見える事を頓着しなかつた。「神は普遍的なものだから云つて、一つの蟲同士の喧嘩の中にもそれが現はれると云ふもんではない。恰度美がどこそこにあつて、どこにない客觀的に限定出來ぬ意味に於て普遍的である云ふのと同様である。」

「神はそれ自身に於て完全なる者なのであらう。だが、それ自身に於て完全だと云ふ事は、微弱なる被造物の側から見た關係に於て、その恵みに於いて、一々完全だと云ふ意味ではない。神としてはいつでも完全なはたらきをしてゐると云ふ意味である。」

「神は死を知らない。何となれば神は生命の中のみ生きるものであるから。神が死を知り能はぬ事は、恰かも太陽が闇を知り得ぬのと同じである。だから神から見れば唯變形であり、宿替へであるにすぎない個體の「死」に對しては神は無頓着で、個體がその變形に對して抱く恐怖の實感に對しては神はその性質上どうも同情が持てず、呑氣であるらしい。」

従つて又、個體ももし内的にその神の生命に同化し、その性質を體得して了へば、「死」に超越する事が出来るであらう。」

六

その朝、春田の叔父さんの處へ「國華」を借りに行く使を引きうけた自分は、その使ひを果した後では又手持ち無沙汰になつた。妹さんはその朝も平穩であつた。そしてその平穩がいつ急變するか分らないと同様に、いつ迄持續するかも知れなかつた。「どうだい。一つ會つて見るか。」

君の來た事はまだ知らせちやアないんだが、遠慮深い顔つきで先生はわざと氣輕にかう訊いた。自分は勿論會ひ度かつた。が、怖はくもあつた。結局さう云ふ對面の場合そらぞらしい平靜を裝ふ事に自信のない自分は、會はない方がい、と思つた。そしてどうせ此方にゐる休みの間になるべくちよい／＼見舞ひに來る事にして、その日の午後又新村と東京へ歸つた。

「タツコケサハジツヒニシキヨ」

かう云ふ電報を顔色を變へてゐる母から手渡されたのはそれから僅か二日後の午頃であつた。

自分が飛んで行つた時には妹さんの亡き骸はもう棺に納まつてゐた。

自分はこの愁嘆場を描寫する事を省かう。兎も角降る丈けの雨は降らなければならなかつた。そして既う散々降りぬいた雨は、自分が行つた事の爲めに、又一降りしなければならなかつた。自分は先生と奥さんの顔を見た丈けで泣いた。先生も泣いた。奥さんも泣いた。外では櫻の花が散つてゐた。

妹さんの死は實に立派なものであつた相である。その朝寢乍らきれいに髪を梳いた後で、妹さんは自分の力のほとく無くなりきつた事を感じたらしい。そして、もう自分はすつかり覺悟が出来てゐる。自分の心から愛する人達の手にかくも身に餘る親切な看護を長くうけた自分は實に幸せな者であつた。自分は自分の死を些しも不幸とは思つてゐない。實に感謝の念で一杯である。と云ふ意味の事を奥さんに話した上、急にぐつと息が詰まるやうに眉間に深い皺を寄せ、唯自分の居なくなる事が些しでも先生達の心を淋しくすると思ふと、それ丈がたまらない、さう云つて、大粒の涙をホロ／＼と頬に傳はせた。—— 臉を赭く腫らせてゐた奥さんはその事を云ひ出しては、又あきらめきれないと云ふやうに顔を手でかくして突つ伏した。小さなお子さん達がるるにも拘はらず、消毒さへ嚴重にすれば大丈夫と云つて、實に肉親も

及ばない手を盡された奥さんを、「その點にかけてはあれも満足して死んだんだし、此方もまあ未練はない。」と獨り言のやうに云つて、先生はなぐさめた。

「なんでもかんでもマイらないわけにや行かない事だ。だが何でもかんでもあきらめなければならぬ事だ。」先生は又ぼんやり外を眺めながら云つた。

その日の暮れ方自分達は妹さんの柩を火葬場まで送つた。さ、やかな野邊の送りであつた。棺側には春田と自分との外に、一足後れて來た新村と、松宮とが蹤いた。

翌朝早く吾々四人と先生とは默然としてその遺骨を拾ひに行つた。土牢の門のやうな感じのする窯の蓋があげられた時、自分は實に啞然とした。ギ／＼とそこ一杯に押し詰めた昨夜の棺。あの繪を畫き、歌留多を取り、共に春の野を歩いた妹さんの肉體を納めた大きな白木の箱。いかに焼いたとはいへ、そのガランとした空虚さは又どうであらう。

そして又その翌日、吾々はその小さな箱に納められた妹さんの灰を竹澤家代々の墓所である東京の青山へ持つて行つて埋めた。

「どうも人間てものはどこまでも人情的に出來た動物で、死んだ者はどこに埋められたつてどうせおなじなんだが、やつぱりあんまり離れた處に一人ぼつんと埋めると、なんだか淋しが

り相な気がして、つい親しい者のわきに、なるべく粗末でなくいけてやりたくなる。」

汽車の中で先生はほ、笑みながら云つて、「どうせ僕らも又近い中にや東京へ引つ越すだらうし。——強ひて小田原にゐる最初の意味はなくなつたわけだからナ。」

「え、越ませうよ。もう妾、何だか小田原にゐる氣はしませんわ。碌な事はないんですもの。」

奥さんも久しぶりに疲れたらしい笑顔を見せてかう云つた。

七

先生の生活は素より妹さんの死後も相變らずであつた。相變らず毎日ちやんと机に向ひ、仕事の畢つた後では、矢張り或る漠然とした淋しさを小さい胸に感じてゐるらしい伊津子ちやん達を相手に巫山戯もした。そして三七日の法事が内だけで心ばかりにいとなまれる頃には先生夫妻の顔には一種雨過天青と云つたやうな清澄な涼しみさへ浮んで見えた。

一體先生と云ふ人が強いのか弱いのか頓と會體の知れない變な人だつた。人並はづれた淋しがりやかと思ふと、人が参りきるやうな痛い目にぶつかつて、先生はなほ毅然としてどことな

く餘裕綽々たる處を持してゐた。そのくせ決して無理に我ん張つてゐるのではない。泣く時には泣く。しかしそれも根に最後の避難所を持つてゐるので却つて安心して泣くのだと云ふ風に見える。

「僕は決して強い性格の男ではない。むしろいたつて意氣地なしなのだ。だから却つて唯覺悟が持ち易いのだ。僕はいつでも食へなくなる時の事を覺悟してゐる。だからかうして結構食つてゐられる事を不思議な幸せと思つてゐる。子供が生れ、ば、僕はいづれ死ぬものを假りに當座あづかるつもりでうけとる。だから健康にして育つてくれると運がい、などと思ふ。愛する者に會ふ時は始めから別れる時の事を覺悟して會ふ。だから妻子にしろ、兄妹にしろ、友達にしろ、存外長くつき合つて行けると幸せな事だツイと感謝する。」

之は決して唯口先きだけの高言ではなかつた。先生は實際その覺悟を體行してゐる人だつた。

にも拘はらず、自分は先生の何事にもケロリとしたやうな無心な顔を見てゐると、なぜとも知らずふつと泪ぐむで了ふ事がま、あつた。それは實際先生が淋し相に見える爲めか、斯く云ふ自分自身が涙もろくなつたからか自分にもわからなかつたけれども、たしかに妹さんの死後、

先生は前よりも一層沈黙勝ちな人になつた事は争はれなかつた。口に出してこそ云はないが、時々ふつと堪へきれぬ程の深い淋しさに襲はれる事があるらしかつた。そんな時、先生はよく話を途中にごまかして、庭の方へ出て行つた。きつと臉を赭くして戻つて來られるんではないかと思つてゐると、元氣な聲で、

「お、からんだ。からんだ。」とうれしげに云つてゐるのが聞こえる。何が「からんだ」のかと思つて出て見ると、昨日までからまりどころのない宙にまよつて、風に靡いてゐた隠元の蔓が、今朝はやつとあの竹にからんだと云ふのだつた。

「やつぱり無理をしちや駄目だね。一度助けてやらうと思つて竿を持つて行つたところが却つて蔓を折つちやつた。」さう云はれて、何か一句出ませんかと云ふと、「さあネ。」とおどけ乍ら大袈裟に空を仰いで

「隠元のつひにからみつきける竹すやし、かネ。何だかちつと長たらしいナ。はつ。發句は駄目だ。コツがわからない。」

が、氣の故か、そんな時でも何となくその笑ひに以前のやうなカラリとしたところがなく、裏にあいた大きな穴がすぐそれを呑み込んで了ふやうな感じがした。そんな事を云ふ自分の方

も、もう辰子さんと云ふあの人はこの世にゐないのだナ、とふつと意識して了ふと、その寂しい空虚さは全く他人事ならぬ堪へ難いものだつた。

翌年の春、兎も角も最後の試験を済ませた自分は、後に卒業論文と云ふ難物を抱へて再び東京の住人となつた。「君でも歸つて來たら」と云つてゐた先生は其頃東京に家をさがしてゐた。

或る日目黒の不動のわきに一軒少し狭まきはあつたが、落ちついて、わりに先生の氣に入り相な家を見つけた自分は、早速それを見に出かけて來た先生を品川に待ちうけてそこへ案内した。先生はその家を一眼見るなり、狡る相な差配の前ですぐ「これやい、。」と大きな聲で云つた。尤も感じさへ氣に入ればその他の點にはからきし眼のない先生だつた。よく奥さんにやり込められては「なるほど。それもさうだナ。」と云つてゐた。で、自分はわざと差配の手前、奥さんが見なければ駄目でせう、と云つたが、すっかりその家に惚れこんで了つた先生は、「なに、あいつが何と云つたつて、主人の僕が自分の家を決めるのに何で差岡へる事がある」と云つて聞かなかつた。

とは云へ自分も先生を嗤ふ資格はなかつたと云ふのは、その敷金の事をうっかり訊かすにゐた事だつた。定まつた収入と云つては只以前の家の家賃があるのみである今の先生にとつて

は、月々七十五圓と云ふ借り賃も樂ではなかつたが、更にその半年分を敷金に前納しなければならぬ事は一寸工面に窮した。小田原の家をたゞむ時にその敷金は取れるには取れるが、それはその半分にも足りない上に、引越しの費用に宛てなければならなかつた。

どうしてもそれを負ける事は出来ない、どうせ借り手はいくらでもあるんだから、と小面に
くい冷淡さで差配から断られた時には先生は情けない顔をした。

でもあきらめた二人はそれから青山へ行かうとして電車を待つたがいつ迄待つても來なかつた。それで恵比壽まで歩いて、やつと鹽町行きの電車にのつた時には雨がぼつ／＼降り出した。通り雨らしいので、傘を持つてゐなかつた二人は墓地下で降りると、わきの花屋で花を買ひがてら雨やみをした。その時霞町の方からブウ／＼とやつて來た一臺の大きな自動車か丁度停留してゐる電車に遮切られて吾々の眼の前でハタと止まつた。自動車の窓からは指輪を嵌めた白い男の腕が出て、指の先きにつまんだ葉巻きの灰を軽くはじいて落した。自分の眼が車中にゐる美しい人の方におのづと引きよせられた時、同時に自動車の中から「おや！ 先生ぢやアありませんか。」と云ふ聞き覚えのある男の聲がした。見るとそれは藤井夫婦であつた。「どうなすつたんです。先生。こんなところで……」帽子をぬいで親し相にかう云ひかける藤

井に之々と話すと、「ぢや恰度い、。そこまで御一緒にお送りしやうぢやありませんか。どうせ私達もあつちへ行く處なんですから。」如才のない彼はかう云つた時にはもう自分で手を延ばしてドアをあけてゐた。

或る追憶の聯想から藤井に對して一種特別な感じを抱いてゐた自分は、この不意打ちに一寸面食はされたが、香氣な先生は「さうか。それや有り難いな。ぢや一つ乗つけてもらふか。」と云つた時にはもう半分體を車の中に突つ込んでゐた。

自分の掛けてゐた場所を先生にゆづつて、むしろ似合はないほど派手な流行りのなりをした細君の前に、自分と並んで窮屈相に座を分けた藤井は、さうして差し向ひになるとさすがにその無沙汰の云ひわけに苦しむでゐた。小田原に先生が移つて以來嘗て一度も顔を出した事のない彼は素より妹さんの計をも知つてゐるやう筈がなかつた。「え？ いつです！」かう眼を圓くした彼は、もうかれこれ一年近くも前の話だと聞くと、今更おどろいて悔みを云ふのも間がわる相に、「そーおですか。」と感慨深く力を入れて、「それやどうも……何とも。ちつとも知りませんで……」と頭を掻き乍ら、それでもしきりに感に堪へない哀悼の面持ちを見せてゐた。

「ねえ、御一緒にお墓詣りさせていたゞかうぢやありませんか。お花も何もありませんけど。……」亭主の感化か、華やかに楽しい生活の産物か、いつの間にかすっかり大人びて社交婦人になりました細君は、調子のいい、流暢さでくやみと一緒に辯解につとめ乍ら、「さうだそりやい、ネ。」と腕の時計を見て賛成する夫をかう促して、「何だかついでのやうで大さう失禮ですけど、今日お墓を教へておいていたゞけば、このつぎにはお花をもつて御参詣出来ますわ。」さうしてどこへ行く處なのか、バツとした裾模様盛装を着けた若い細君は、じめじめとした土の上をダンス用とでも云つたやうなフルートの爪先きでひよいくと小跨ぎにして、小さな墓標の前にかゞみ、ピカ／＼する指輪を嵌めた白い手を合せると、その後ろに暗然として立つたま、藤井は敬虔に頭を垂れた。

よかつたら停車場までお送りしませうと申し出るのを、丁度雨もやむだので電車迄で結構と、近い停留所まで送つてもらふ車の中で、藤井はなほも苦しい云ひわけをつゞけ乍ら「いや、まつたく、一度是非二人で上らう／＼と思つちやアるんですが、何分にもどうも貧乏暇なしで、何やかんやしよつ中追はれつゞけてゐるもんですから、つい……」

月に百圓以上は必ず自動車代を拂ふと云ふ身分で「貧乏暇なし」などと陳腐なお坐なりを云

ふ彼と、せい／＼中學の教師程度の生活を相應の暮しとして、嘗て一度も「貧乏暇なし」などと云つた事もなければ、感じた事もないやうな先生との對照を眼の前にして、自分は皮肉を感じないではゐられなかつた。

松宮の世話で、先生一家が東京へ引き移つたのは、しかしそれから間もない事だつた。下澁谷の今の家が即ちそれである。間敷は小田原の家と同じであるが、部屋がどれもこれも小さい上に庭と云ふものが猫の額ほどしかなかつた。それでも比較的家賃が安いのと、閑靜なわりに出端が、いゝので、一體は贅澤な方の奥さんも「まあ／＼東京ぢやこの位で辛抱しなくつちやありませんわネ。」と愚痴もこぼさなかつた。

「なアに、俺だつてその中にや案外賣れるやうにならないもんでもないさ。さうしたらもつと堂々たる邸宅に住むさ。」

こんな冗談を云つて先生が微笑ふ。

「ほんとにね。八百ちやんがお嫁に行く時分には、さぞ立派なお支度が出来るでせうよ。」奥さんもさう云つて微笑ひ乍ら、膝の上の八百ちやんの頬にキスをした。

吾々先生の周囲の者が集まつて、小さな同人雜誌を出す話になつたのもその頃だつた。同人

と云ふのは新村と、松宮と、小田原の春田と、自分とであつた。そしてその外にぼつ／＼よき相な青年を加へた。先生も時折感想を寄稿してくれた。雑誌の名は「虚空」と先生がつけた。

八

歳月は流れて行つた。「え、其中書きますよ」と云ひ／＼、卒業論文を自分が益々荷厄介にしてゐる間にその催促者の母も故人となつて了つた。どうかしなくてはならぬとも思ひ乍ら、さし當り何處へと云つてつとめ先きもない自分は、義兄の脛を嚙り乍らなほ下宿にぶら／＼してゐた。卒業論文は永久に書かれ相もない。

大正十二年九月一日の大震災はその下宿に自分がぶら／＼してゐた間の出来事だつた。

波の上を歩くやうな夢中さで往來へころけ出した自分は、一しきり地震がおさまると、自分の生活の支持者である義兄への見舞ひを後廻しにして、一番に先生の處へ駆けつけた。そして立關先きに莫座を敷いてゐる無事な人々の顔を見た時には我知らず涙が出て、先生の手、奥さんの手、小さい人達の手と次ぎ／＼にぎりしめた。

「よかつた。よかつた。ありがたう！ 僕達も君はどうしたかと思つてゐたんだ。」

かう言つたなり、先生も涙に言葉を遮切られてゐた。

山手の地盤のい、場所にあつた先生の家は幸ひ、只壁と瓦とが方々落ちたゞけだつた。先生はすぐ自分の義兄達の安否を訊いた。「えらい事になつたが、僕達はもう安心だ。早く姉さん達を見舞に行つて上げ給へ。」と云はれた。

併し自分はこの大事件についても多く書く事はしまい。數十萬と云ふ死傷者を出した此大災事も先生の事を書く上には一個の妹さんの死にも當らない出来事だからである。が、東京の半分ほどを焦土と化した火事がやう／＼全く鎮火した日の暮れ方だつた。どうしたのか、焼け焦けだらけのぼろ／＼の着ものを着た「兄さん」がひよつこりとやつて來た。

兄さんはその聲を聞いて上口へ飛び出した先生の顔を見るなり、「お、助かつたか！」とおろ／＼聲に云つて、上り框にぐつたり腰をおろしたなり鼻をす、りだした。

「随分さがした。……君が此方に住むでつて事を聞いてたもんだから。」一緒に泪ぐむだ先生に手を把られるやうにして上がり乍ら兄さんは又さう云つた。

深川にゐた兄さんは火の海の中をくゞり乍ら、あらゆる惨苦を舐め／＼、三日三晩救助に働いて來たと云ふ事だつた。

「いや、まったく、他人の幸せつてもなア有難いもんだ。普段は分らねえが、俺達の幸せにとつて他人の幸福つてものがどんなに大事なもんかつて事が、今度しみん、俺にも分つたよ。家すらりと並んでる此方へ逃げて来ながらナ。」

先生のゆかたを着換へさせられた兄さんは棒のやうになつた黒い脛をさすりく、かう云つた。

この兄さんの口からこの感想を聞いた時、先生は眼に涙をうかべた。「まったくね。」さううなづいて答へてゐるのが恰かも、「有り難う。」と禮でも云つてゐる風に見えた。

「僕も何だかかうしてちや濟まないやうな氣がする。自分にも出来る事がありや何かして働きたい氣がする。」と云ふ先生に

「まあい、よ。なアに、君はやつぱりこ、で君の仕事をしてゐりやい、んだ。君なんぞ飛び出したつて仕様ががない。俺がするよ、君の代りは。こんな時だ。俺みたいなやくざもんがちつたア役に立つのはナ。」あんぐり口をあいて兄さんはかう云つたが、一晩ぐつすりやすんだ翌朝には又甲斐々々しくゲートルを脚にまきつけて、どこへともなく出て行つた。

小田原がひどいと聞いて、春田はどうしたらうと思つてゐるところへ自分の方から兩親を見

舞ひ旁々春田がやつて来た。春田の話によると、先生のゐた家もつぶれ、妹さんの別居してゐた家もびしやんこだと云ふ事だつた。

「ですから分らないもんだと思ひましたよ。」春田は云つた。「もしまだあの家にゐらしたら、あの御病體でどうする事も出来んならなかつたでせうし。何しろあの様子ぢや、一べんにピシヤツと行つちまつたやうですからネ。」

「ほんとにもつと悲惨な目に遭つたかも知れないね。運てものはまったく分らないもんだ。」二十日頃にはミュンヘンにゐる愛知からも態々先生の處へ見舞ひの電報が来た。此方からはすぐ皆無事と返電を打つた。しかし皆が完全に無事ではなかつた。松宮は弟を亡くした上に店と住居とを共にきれいに灰にした。そして保険の取れる見込みはなかつた。彼は遂方に暮れてゐる兄さんと、病身の阿母さん達と一緒に親類の家につつてゐた。そして相變らず「仕方がありません。」とすましてゐた。

その灰になつた松宮の家の向ひにはS——と云ふ有名な富豪の城のやうな邸があつた。父親の權勢で揃ひもそろつた庸劣な息子達が揃ひもそろつてそれ／＼い、位置につき、妾腹の子をまげて二十人に近い大家族の一人として缺けた者がなく、盛大に繁榮して、萬人の羨む的とな

つてゐる名家であつた。震災に遭つてその宏莊な西洋館は勿論びくともしなかつたが、丁度又その隣り迄一砥めにして來た火事が、その見上げるやうな石垣に立ち塞がれたものか、そこでばつたり食ひとめられてゐた。

吾々はよく復興し行く焦土の跡を歩いては人々の不撓な勇氣と健氣な働きぶりに感心し、そのめざましい復興の様を他人事ならずよろこんだ。「お前も偶まにや出歩いて見ろよ。そりや見ものだぜ。」と奥さんをさそつて、或る日又町の方へ出た時だつた。偶然そのS——と云ふ家の前を通つた吾々は、一方不幸に不幸の重なる小さな松宮の家の焼け跡と、飽く迄も運のいい城のやうなその家とのあまりに際立つた對照を意識せずにはゐられなかつた。

「神様つてものは却々皮肉なやり方をするからナ。時々ちよつと、いたづらみたいに。」

人の幸せを呪ふわけぢやないけれど、と正直な奥さんがその聳える御影石の塀を見上げて運の不公平をつぶやきかけた時、先生は何か面白がる事のやうにかう云つた。

「ですけど、——誰からも不幸せと思はれてゐて、自分でも不幸だと思つてゐる者が、本當は幸せだとも行かないでせう。」

「無論さ。自分で不幸だと思つてゐちや問題にならない。」

「ぢや、やつぱり皮肉ばかりでもないわね。やつぱり運のものだわね。結局。」

奥さんの云ふ事は論理的だつた。

「そりやさうだ。運がわるすぎちや何だつて仕様がな。だが、つまるところ、満足がなければどんな幸福だつて矢つ張り仕様がな。」

「……妾、その幸福つても、事を此頃又考へてゐるんですけど、……つまり満足の事なんぞでせうか。」

「さうだ。満足のこつた。もつとくはしく云やア、自己満足の意識、自覺とでも云ふか。その自満足の内容が幼稚な低級なものであらうと、進んだ高尚なものであらうと……。」

「ぢや、あ、云ふ……お妾を何人も持つてゐるつて云ふお金持ちの幸せもやつぱり幸せにはちがひないんだわネ。」

「うむ。本當に満足さへあるならナ。いかに幼稚なものだとは云つても、幸せの部類には相違ないさ。神様つてもものはそんな幸福位をケチ／＼呉れ惜しむシミツタレぢやないからナ。」先生は樂に歩きながら云つた。「そりや又その筈さ。富貴である事はたしかに貧賤である事よりや幸福であるべき筈の、結構なこつたからナ。但、さう云ふ幼稚な幸福者には兎角幸福つても、

一番根本的な條件が抜け易いだけの事だ。」

「……て云ふと？」

「それや何かつて云やア他でもない、安心さ。」

實際——先生にとつて——眞に幸福な人とは眞に深い安心境にゐる人の謂に他ならなかつた。人は固よりその「安心」を把持せずとも一時に快樂し、よろこぶ事は出来る。然しもつと持久的な不漸のものである幸福の根據となる安心とは、即ちその人の本心が最も落ちついてゐられる状態、更に積局的には満足してゐられる状態である。而して本心が眞に安らかであり、満足の状にあらんがためには、唯消局的に「良心に咎める」悪を作さぬのみならず、必ず進んでその内面が宇宙法則、乃至正義の地盤の上に生き／＼と立つ事が肝要である。人の幸福はそれ／＼この地盤の上に根ざす程度の確實さ、深さに應じて堅實なるものである。一言にして云はば、幸福は同時に眞に生きた「徳」でなければならぬ。人はこの「徳」によつて運命に對してアクティヴである事が出来、所謂隨處に主たる事が出来得る。かくて幸福とは「徳の報酬ではなく、徳そのものである」と云ふスピノザの定義は間違つてゐない事になる。「運命は徳の芽を掴む事は出来るが、その實を殺す事は出来ない。」と先生は云つた。

九

先生の主観はだん／＼豊かに悠々と完成の域に近づいて行くやうに見えた。そして益々深い處に張つて行くやうに見えるその根を「震災」もビクとも揺がす事が出来なかつた。

「人生も自然も普段は概しておとなしい顔をしてゐるが、時々ひよつと、ぞつとするやうな凄切断面を披いて見せる。すると浮かれてい、氣になつてゐた人間はだしぬけに深淵にぶつかつたやうに度膽をぬかれて戦慄し乍らその前に立ちすくむ了ふ。ふら／＼呑氣に走つてゐた者がハタと立ち停まつて考へる。そして思ひ上る事のおそろしさを知り、自然と運命とを馬鹿にする事を怖れるやうになる。」先生は云つた。

「本來人間に宗教心と云ふものがあるから神があるやうに思へるので、本來神があるから人間に信仰が生ずるのではない。」かう云ふ説を持つた青年が或る時先生を訪問して、それに対する先生の意見を訊ねた。

「それは結局どつちでもおなじ事せう。もし君に口先き丈けでなく、本當に宗教心と云ふものがあり、その實感があるならば、その實感を起こさせる或る力のはたらきを自分の内に丈け

區切つて感じやうと、博く全體の法則のうちに感じやうと。何だつて感じなければ何でもないもんだし、感じれば又それ丈けのものです。」

「私はこの世界の中に……」と青年は云つた。「神的とも云ふべき或る一種の力のはたらきがある事は感じます。が、それと同時にその力と對立して一方否定的な、謂はゞ惡魔的（ディモニック）な力が存在してゐる事實も認めないわけに行かないのです。」

「君は世間には善人ばかりゐると思つた事がありますか。」先生はすまして問ひ返した。

「そんな事思つた事はありません。」

「善人ばかりゐる筈の世と思つて見れや惡人の多いのにおどろくでせう。」

「さうです。」

「反對に世間でものは馬鹿と惡黨ばかりの巢窟だと思つて見れや、案外馬鹿でない人間や、善人の多い事に君はおどろくでせう。」

「え、利口な人間を多いとは思ひませんが、善人でものは不思議に少くないと思ひます。」

「何でも本來全體として見るべきものを分割して見ると、間違つて見ると、間誤（ミヤゴ）つて見ると、先生は微笑（わら）ひ乍ら云つた。「世界だつて同じ事で、もしその全體の中に神的な力を丈け簡單に信じて、又強

ひてその一方丈けを誇張して見やうとするならば、さう云ふ要求が強ければ強い丈け、當然そのコントラストとして反對な力——と云ふのは勿論、實は唯この地上の人間や生類仲間の都合にかまはない宇宙力が一方に際立つて感じられてくるのは當然で、だから又あべこべに此世界を本來惡魔的な力の支配する處と思つてか、れや君はそれに矛盾した神的な力の實在してゐる事と、その力のあらはれ方の實に微妙な事、神祕の深さにおどろかずにはゐられないでせう。」

市中にも眼立つて蜻蛉の多くなる初秋から栗の熟する頃にかけて、散歩好きの吾々は又よく「特別なよさ」のある東京の近郊を歩く事をたのしむだ。そしてその度びに紅（べに）の毛氈（マフラー）を敷きつめたやうに曼珠沙華（マンジュシャウ）の多い小田原の秋を想ひ出した。

「一寸小田原がなつかしいナ。」が、かう思ふ瞬間、吾々は又めい／＼の胸裡に妹さんを想ひ浮べて、ふと口を噤むで了ふのだつた。

が、妹さんの事と云へば、震災の時以來、又ちよい／＼ふらりと顔を見せるやうになつた兄さんは、何か頼みに来る時のきまつた筆法できつと一杯氣嫌に、

「私も一つ同人のお仲間に入れて貰へませんか。いや、かう見えても私だつて、一かどの哲學を持つちやアゐるんですぜ。馬鹿苦勞を舐めぬいた經驗でネ。はつは。」雜誌を擴げながら

威勢よくこんな啖呵を切る揚げ句には、又もや例の「見知らぬ妹」の居場所が分つた事を持ちだして、

「俺も弟の厄介になつてゐる分在で、人の身の上の心配なんぞ出来た義理ぢやアないが、何しろ現在血を分けた妹の事であつて見ると……」さうして何か手紙のやうなものを出して見せて先生の顔をのぞきく、今度こそ一つ行つて會つて見やうと思ふ。そしてもしあんまり惨めにしているやうなら、此方へ連れて来て、何ならこの家に女中代りにおいておく話にしてもどうかと思ふ。「さうすれや君にとつても又あの辰子の身代りが出来て、いくらか淋しくなくならうと云ふもんだし……」こんな相談を持ちかけてゐるのが袂越しに茶の間から聞かれた。

妙な話ではあるが、その「妹」と云ふ人が現在どこかにゐると云ふ事はまんざら嘘でもないらしかつた。實を云ふと、自分は兄さんが昔どこかでつくつた自分の私生兒を、そんな「妹」などと云ふ名で先生の處におしつけやうとしてゐるのではないか、と一寸邪推した事もあつたのであるが。しかしそれにしても兄さんがその「妹」に會ひに行くと云ふ旅行を果して實行するものかどうかは自分には信じかねた。が、先生はそれを信じてゐるのか、それとも只斷はれないからか、兎も角、兄さんはその話で又苦しい先生のポケットの中からいくらかその旅費を

うけとつて行くのだつた。

そんな事のあつた後では先生はきつと起ち上つて、「さア一つ外を歩かうぢやないか。」と晴々しく沈黙を破つて、促すがおきまりだつた。そして夕空に高く響く張りつめた百舌の聲がキィ〜と鋭く聞かれる表へ出るに、近所の家の爺さんが丁度一足先きを歩いてゐる。と、又その後から花ちゃんと言ふ伊津子ちゃんのお友達がチヨコ〜と駆けて来て「イツチヨニイクウ」と云つた。爺さんは後ろをふり返へつて相恰をくずし乍らおいで〜をした。そして何方から先きに手を出したともなく、いつの間にか竝んで歩くお爺さんの鞆だらけの手は殆んど器械的に小さい孫の手をにぎつてゐた。曳きつ曳かれつしてゐる事を互に全で意識しないやうに。

その様を後ろから「あの自然さはどうだ。君。」と、見惚れて眺めながら、先生は久しぶりにこんな感想を喋舌つた。

「神は自然さのうちにある。決して不自然の中にはあらはれない。無心にして宇宙の法則にしたがひ、自然に行動してゐる時、僕らは決して罪を感じるものぢやない。僕らの心は安らかだ。それは無意識に神の法則の中を歩いてゐるからだ。が、理窟はどんなに尤もらしくついても自

然の法にそむいた事をしてゐる時、どこかで無理をしてゐる時、僕らの心は決してそのやうにゆつたりと安らかである事は出来ない。それはどこかで神の法則を踏みはずしてゐるからだ。

眞に自然であるとは神と共にある事だ。僕らの心が肉體と同じやうに、病的にならず健全な安泰にゐる時、僕らは善を思はず、悪を思はずして唯悠悠たる自然さのうちに直ちに神を見る事が出来る。――」

「つまり自然の裏にですか。」念のためにかうその時自分は訊いて見た。

「いや、うちにだ。自然の裏と云ふ場所はないからね。眼に見えるまゝの自然が一切だ。」先生はきつぱり云つた。「しかし唯「自然」と云つたんでは誤まり易い。僕は「自然さ」と云ふんだ。そこが本當によく分りや、人は自由になれるんだ。」

「たゞへば肉交と云ふやうなもんでも……」歩きながら先生は一寸口を喋むで、又つゞけた。「勿論放縱なのはよくないし、性慾を強ひて美しいもの、大びらにすべきものと讚美するのも滑稽な不自然だが、實は本當の意味で自然に、單純に行はれるものである以上、僕はあまり八ヶ間しい事を云ふ者に賛成は出来ない。それは隠れてすべきものぢやあるが、結局神の眼から見れや、僕らが蝶のつがふの見て感ずる可愛さの程度以上にいくいもんぢや決してないにちがひない。」

かう云つた先生の道徳を甘まいと云つて或る批評家が非難した時、先生は苦笑して云つた。

「僕は人間の蟲のよさが神に微塵も通用しない事を強く感じてゐる點に於て、そんな人達に決して劣るとは思はない。だが僕は實にそれをあきらめきつてゐればこそ、却つてそこからすなほに子として親に甘へる蟲のよさを慫と自分の内に取つてゐるのだ。僕は安心して神に甘へる。又甘へたい。それは實に神の無限大と自分の微小さを知るからだ。そこに僕の自由がある。」
自分はもう先生の思想は動かす事が出来ないと思つた。

一〇

その中には愛知も歸つて來た。彼は豫定より半年おくれてわざと突然にひよつこり歸つて來たのだつた。

「一つおどかして上げようと思つて。つい書き度くなる知らせの便りを書かないために随分苦心しましたよ。」と彼は笑つたり、涙を拭いたりした後で云つた。出發の時から見るに、彼は餘程垢抜けはしたが、相變らず珍竹林で風采は上らなかつた。

「まあ、愛知さん、ちつともハイカラにならないのネ。切角三年も洋行したらもうちつとハイカラになつていらつしやりやい、のに。」

「さうですか。そんな事はありませんよ。」背り返へつて短かい上着の袖を引つ張り乍らかう奥さんに答へる彼を見て、皆は笑ひ乍ら再び急に賑やかになつた事をよろこんだ。

「あんまり貴方がゆつくりしていらつしやるもんだから、きつとむかうでい、人が出来たんだらうつて、噂してたんですよ。」奥さんは紅茶を持つて來乍ら、大きな眼で睨んで冷やかした。

「ゆつくりしてゐたつてどうも初めつからの約束で、勝手に歸つてくるわけに行かないんだから仕方がありません。尤もモテて困りましたがネ。」

根くなり乍らこんなテレ隠しを云ふ彼に「彼方の女はどう。やつぱり綺麗でしょ。」など奥さんは盛んにからかつてゐた。その困まり方を笑ひ乍らい、加減に救ひ出すやうに、先生は繪の話や、芝居の話を持ち出した。自然の好きな先生は固よりその同一の心情から、又人工の藝術に淺からぬ造詣と、熱い愛とを持つてゐた。

盡きない土産話の揚句、一つ愛知の歓迎會を、又昔の想ひ出のある鰻屋でやらうと云ふ話になつた。

愛知を主賓に、先生夫婦と、「虚空」の同人丈けが集まつたその會場は震災後の再築した平家で、あの大きな鯉のゐた池も埋められ、昔の想ひ出は味はれなかつたが、會は實に水入らずの氣持ちのよいものだつた。

「やつぱり日本へ歸つて、かうして元ミの親しい仲間に出ると、實にしんみりして本當に自分の家に歸つたつて氣がしますよ。」

い、色になつて愛知はかう云つた。そして久しぶりに何か先生の話を聞き度ひもんだと云ひ出した。皆もそれに賛成したが、先生は氣のりのしない顔で、別に話す事もなし、それに話をするとすると、折角くつろいでゐる座が固くなつてまづい、かうして樂に座談をする方が面白いと云つて、話はしなかつた。

が、愛知の歓迎會は同時に又彼の送別會となつて了つた。三年ぶりに漸く待ちくたびれた彼の歸朝を享樂する暇もなく、吾々は又彼を仙臺に送らなければならなかつた。

「どうも御縁の薄いものは仕方がありませんわネ。それでもまあ、お芽出度い事なんですから結構ですわ。」かう別れを惜しむ奥さんに

「あんまりお芽出度い事ありませんよ。しかしまあ、今度は近いんですから、御馳走の時に

は前もつてハガキでも一本下されや、すぐ飛んで來ますよ。」

愛知はかう云つて笑はせ乍ら發つて行つた。

その時先生夫婦は、い、お土産をもらつて急に好きになつた小父さんの愛知を是非一緒に送りに行く云ふ伊津子ちゃん達をつれて、上野迄見送りに行つたのだつた。そして歸りには銀座の四丁目迄電車で來て、そこからぶら／＼賑やかな夜店を見乍ら新橋の方へ歩いてくると、或る喫茶店のやうになつた果物屋の店に様々の綺麗な小鳥を澤山賣つてゐるのが小さい人達の眼にとまつた。實際それは吾々大人でも一寸引き寄せられて眺め度くなるほど爽やかな装飾代りになつてゐた。小さい人達は人さし指を啣えて、その積み重ねられた籠の前に立つたまゝ、動かなくなつた。そして遂々「あれ買つてヨウ。」と云ひ出した。

「生きものつてものは可愛いけれどね。死ぬといやでしよ。い、え、ぢき死ぬのよ。弱いもんだからネ。」奥さんはかう云つて「さア／＼」と引き立てやうとしたが小さい人達は「買ふんだ。買ふんだ。」と冠をふつて、我ん張つた。それに先生がどうでもい、と云ふやうな顔をしてその前にうろつてゐるので、小さい人達はなほ聞かなくなつた。

「田舎にゐると小鳥も珍らしかアないが、東京のあの家にゐちやあんまりぢやむさくつて、子

供も生き／＼したものがほしくなるよ。」

「まあ、御自分がほしいもんだから、い、齡して。」

仕様がなほいと云ふ顔をし乍ら奥さんも微笑ひ／＼いつの間にかその明るい店の中へ手を引きずられて這入つてゐた。

何でも買ひさへすれや氣がすむんだから安いのをこさがした揚句、「これはいかゞです。丈夫で、よく啼きます。」と云つて店の者が持つて來た籠の鳥は五十雀の番ひだつた。

「五十雀か。ふむ。五十からは面白い。」

飛んだ語呂合はせを興がつて、小さい人達は少し不満であつたが、先生は「これがい、よ。これがい、よ。」と遂にそれを買ふ事になつた。

そしてその時から四十七になつてゐた先生の書齋の窓に五十雀が囀るやうになつた。

一一

更に月日はすぎて行つた。

小さい人達は相繼いで小學校へ通ふやうになつた。

或る時行つて見ると、先生は床をとつて横になつてゐた。

「どこがおわるいんですか。」立つたま、訊くと、

「いや、一寸又腹をいためてね、別に意地きたなをやつたわけでもないんだが、下つ腹がへんに痛むんだ。なに、もういゝんだが、と答へて、「退屈なんで誰か来てくれるといゝと思つてゐた處だ。」

机の上には書きかけの原稿がめづらしくまた散らばつたまゝになつてゐた。

「あんまり仕事をつめてなさりすぎたからぢやないんですか。」座蒲團を敷き乍ら自分は又訊いた。

「一つはそれもあるかも知れない。雑誌に頼まれて、今日が丁度その〆切り日だと云ふんで、ついで例の馬鹿律義で少し無理をしたのがわるかつた。なアに二三日おくれたつて構やしないんだが。」

「それやつまりませんでしたね。感想ですか。」

「うむ。少し善の事をわざと理想的に定義しておいて見やうと思つて書きかけたんだが、やり出して見ると中々大問題で、やつぱりさうちよつくらまとめるつてわけにも行かないんでネ。」

その時先生の書いてゐた事は要するに眞、善、美が一つの「正」に於て一致すると云ふ事と、その數的法則が幸福との關係に於ても同一に現はれると云ふ事との問題であつた。

先生は先づ調和と云ふもの、定義から、美と快との關係を簡單に説明し、更に快と幸福との關係を論じて行つた。そして或る事柄の性質が調和状態にあるが故に、即ち「正しき」状態にあるが故に快なる事は、即ち「事柄の質に於ける美」であつて、質に於ける美は即ち善である。そしてかゝる善を美としてよろこぶ事が徳なるもの、所以である。併し乍らそのよろこびである幸福と云ふものが唯善徳のみに「値すべきもの」であつて、善ならざるものはかりそめにも幸福に與かる權能なしとするカント的嚴格主義は到底先生の執り能はざる處であつた。何となれば眞の幸福と善との一致はそのやうに當爲上の規則づくによつて生ずるものではなく、(人は幸福を感じ「可き」だから云つて感じる事は出来ないから)唯、善を一の調和としてそのまま美の如く「快」に感じ得る人の事實上の實感としての一致にすぎない。故に人類の要求を自己の心として苦痛を感じざる善人にまつては人類のよろこびは凡て幸福であるが、不善なる者と雖も人類の一員である以上彼が不幸である事は人類にとつてよろこびであるべき筈はない。善なる者の不幸はたゞ一の惡であるが、惡なる者の不幸は二重の惡である。しかし吾等の解す

る善とは一定の限界内——個體なら個體の中に於ける——全要求の調和であるから、人類にあつてもその最も完全なるものは、物質的にも精神的にも、全要求の調和でなければならぬ。それ故それは唯倫理上の善のみによつては達せられない。人類の全精神要求が完全な状態の中に皆本望を遂げ、飽和満足する處にいたつて人類は眞に安定を得、幸福となり得る。倫理的善は畢竟この至善至福の境に全人類の状態を進めるべき脊椎骨にすぎず、脊椎骨だけでは美にならない。理想的善は圓滿な釣り合ひを保つた人體の如く、健全にして美しく、それ故に事實上「よろこび」に充ちてゐるものでなければならぬ。——

人間の憐れむべき者たる事を知らず、力を知らずに、徒らに狹隘な道德偏重に陥る者に對して、先生はかう云つた事を吾々の精神的感覺を土臺にして、だんぐ歸納して行きつゝ、あつた。「寢てゐるといふんな事を考へる。問題は限りなく後からく」と湧いて來て盡きない。どうせ一生死ぬ時まで考へなくちやならないんだ。この頭と云ふ奴が働く中はね。まあ、ゆつくりばつ／＼やらう。急ぐ事はない。」

先生はぢき起きた。

「僕はある「善」の問題を一つ大々的に研究論文として考察して見たいと思ふ。概論的でな

く、もつと實證的にいろんな方面から。昨日から又改めて最初からかゝり始めてゐる。」

眼鏡をはづして机の上においた先生はかう云つた。

「百枚にはなるだらう。だが、どうも疲れる。前にはこんなに疲れ易くはなかつたんだが。」

「あんまり無理をなさらぬ方がいゝでせう。まだきつとすつかり恢復しきつてゐらつしやらないんですよ。」

色のわるい頬のこけた顔を見やり乍ら、自分がかう云はずにはゐられなかつた。

「ほんとに凝り性つたらないんですからネ。少し貴方から注意して下さいよ。本當に體も何もたまつたもんぢやありませんわ。」

わかからかう云ふ奥さんの調子も本氣であつた。

「なに、そんなにやりやしない。大袈裟に云ふなよ。」先生は微笑ひ乍ら細長い腕を撫した。

吾々は又例によつて一寸外をぶらついた。

ボブラの並木を前に植ゑた天主教の會堂の前を通つた時、中から讚美歌を歌ふ少女達のコーラスが薄碧い夕空にひゞいて高らかに洩れ聞こえた。

「お、きれいだ。」先生は一寸立ち停まるやうにして云つて、頭をふつた。

自分はへんに泣ぐむやうな気持ちになつた。

「君、基督の教へたお祈りは一番初め何と云ふんだつね。」しばらく黙然と歩いた後で先生は自分にかう言葉をかけた。

「天にまします我等の父よ、御名をあげさせ玉へ。」と云ふんでせう。」

「さう。さう。さうしてその次ぎに「御國を來らせ給へ。御心の天に成る如く地にも成らせ給へ。……」と云ふんだつね。……」先生は云つた。「あのお祈りの言葉は、味つて見ると、一々實に正しい順序で出てゐると僕は思ふよ。先づ一番先きに、神よ、御名をあげさせ給へと云ふ言葉が出なければならぬ。そこがつまり信仰と云ふもの、一番エッセンスになる處だからだ。只、神よ、御名をあげさせ給へ、南無阿彌陀佛と禮讃する丈けで足りる心持ち、謂はゞ一番深い小乗の境地だ。そしてその次ぎに御國を來らせ給へ。御心の天になる如く云云……と云ふ大乘の本願が来る。それから後の祈りも無論皆それ／＼重要な言葉だが、前のに比べるとだん／＼部分的になつて、重もさも減つてくる。と言ふのは個體は何と云つても第一に個體で、それが屬してゐる人類は關心の順序上、どうしても第二になるからだ。」そして、「どうも、宗教のどん／＼の處は、神よ、御名をあげさせ給へ、御心のまゝにならせ給へ。」と云

ふ處に、そこに歸するんぢやないだらうかね。——僕にはどうもさうとしか思へない。」

「だが、君はクリスチャンにならうと思つた事があるかい。」

先生は又突然にかう云ひ出した。自分は昔、ならなくちやならないやうな氣のした事はあるが、本當にならうと思つた事はないと答へた。そして基督は實に尊敬するが、と附け足した。

「尊敬はするが、一番理想的な人物とは思はない、さうぢやない。」

「随分理想的な人間だと思ひます。」

「だが、もし本當に一番理想的な人間だと君が基督を思ひ込んでゐるなら、君は當然クリスチャンでなければならぬ筈ぢやないかね。」

「え、つまりどこかで満足しきれないからなんでせう。」自分は下を向いて歩き乍ら答へた。

「基督の人格にはなくなつて、その思想に。」

「さうだ。さう云ふ事になるね。僕らの一番満足しきる理想的な人物は、結局釋迦でも基督でもなくつて、やつぱり僕らの理念の裡に求めるより他はない。そして僕らはその理念の人格にだんだん自分をた、き上げて近づけて行くよりほかはない。」

山王の祭りでにぎやかな日だった。何だか此間の見かけが氣になつて行つて見ると、案の定先生は又床に臥してゐた。や、季節おくれではあるが、妹さんの晝いた佛手柑の掛け軸を奥さんに云ひつけて床に懸けさせ乍ら、そつちをむいてゐる先生の脊中を見た時、自分はその細いのおどろいた。そしてよつぼどわるいのかと思つた。が、此方へ寢返へりをうつた顔を見た時、やつぱり大した事はないんだナと思ひ乍ら、安心する事も出来なかつた。自分は此日のやうに疲れた先生を見た事がなかつたからである。

「御覽なさい。塚元さん。又無理をしたもんだからこんなに寢込んでしまつてゐるんですの。本當に仕方がありませんわ。」

軸の傾斜を掛け竿の先きで直ほした奥さんは心持ち頸をかしけてながめ乍らかう云つた。

「此間散歩なすつたのがお障りんなつたんぢやないですか。自分はまだ膝を折らずに訊いた。

「さうでもないんだよ。何が原因と云ふほど無理をしたわけでもないんだが、どうも熱の工合が只の腸加答見なんぞとはちがふやうだ。」先生は大儀らしく云つた。「下つ腹がいやに脹るん

だ。」

しかし今朝醫者が来て見た様子では別に大した事はない。安靜にして一週間も藥を飲んでくれや熱も下るだらうと云ふ事だと奥さんは話した。髻が延びてゐる故かよつぼど見かけがわるい。ほんとに大事にして貰はなくちや困ると云ふ自分に

「なあに、心配する事アないよ。大事にはしやうが一體僕のやうな性分は長生きするやうに出來てるんだからネ。」と苦笑ひを浮べながら「だがどうして日本人はかうエネルギーが弱いかね。少しがっかりする。」

張りのない聲でさう云ふ口許から小鼻へかけての深い皺を見た時、何と云ふいやな皺だらうと思つた。唯左右に一本づゝの皺であるが、それが顔全體を病人らしく陰鬱にしてゐる事は夥しかつた。

「何か讀んで見ませうか。」

大儀さうに話の途切れ勝ちな先生に自分も退屈なのでかう云つて見た。「さうだね。」と先生は背づいて、何にしやうかと起つて書棚を見てゐる自分に

「ゲーテの詩でも讀んで見ないか。ゲーテのものを讀むと心が伸びくと開闊になつて、おの

づと浩然の氣を養ふ。時々読んで見度くなる人だ。」と云つた。

そのくせ読み出すと、じつとしてゐる先生はいつの間にか他の事を考へてゐる様子だつた。

「一寸君、失敬。その机の上にある手帳と鉛筆を取つてくれ給へな。」だしぬけにこんな事を云ひ出して

「快樂を獲んとする願ひは素より倫理的意志とは無關係であるが、(必しも反對ならずとも) 救はれ度ひと云ふ願望は實は同時にそれ自ら善ならざる存在が善なるそれにならんとする欲求と同一物なのではあるまいか？」かう走り書きすると、又疲れたらしく手帳を放り出して、深い息をした。

「もうよしませうか。少しおやすみになった方がい、でせう。」自分は「西東詩篇」を下において云つた。

「いや、読んでくれ給へ。い、氣持ちだ。どうせ眠れやしないんだから。」かう云つて、「さうだね。ぢやもつと、理屈をぬきにした……うむ。さう、芭蕉の句でも聞かうか。久しぶりに。」で、自分は又別の本をひらいた。読む方にとつても之はずつとのんびりして、読み安かつた。片つ端しから読んで行く中に、「あら尊ふと青葉わかばの日のひかり」と云ふ一句が出た。

「一寸。」先生は片手を上げた。「もう一度それを。」

そして再び自分がその句を読むと、先生はそれを口ずさんで

「すばらしい句だ。……結局僕も只、さう歌ひ度いんだ。」

さう云ふと、ぶつりと口を噤むで、むかうを向ひて了つた。

「何だか、普段わりに丈夫な故ですか、今度は妾、へんに氣になるんですの。だつてちつともあのお醫者の云ふやうに行かないんですもの。」肩に八の字をよせた奥さんは歸りがけに自分を廊下に引きとめて云つた。「大した事ぢやないんでせうけれど、よかつたら明日も來て下さらない？」

無論來ますと自分は答へた。さうして誰かもつとい、醫者に見せちや如何と促して歸つた。

奥さんも心細さうに八の字をよせては云ふもの、それは只その氣持ちを自分に訴へる事によつて二分に薄め得る程度の不安らしかつた。奥さんの不安が半分になる丈け自分の心配は二倍になるやうなわけではあるが、そのくせへんに心のねばり強い先生の體質を思ふと、自分も勿論眞劍には氣を揉めなかつた。

丁度翌日東京に用事の爲めに出て來た例の小田原のドクトルが先生を訪ねて、偶然に診察す

る事になつた時もドクトルの診断は、せい／＼重く見て軽いチフスの兆候があるとも思へるが、多分そんな事にならずに済むだらうと云ふ高を括つたものだつた。あのドクトルの診断であるからさう信用も出来ないとは思ひつ、事實氣分もい、らしい先生の顔を見ると

「何しろ貴方は運がお強いんですからね。」と奥さんも心から安心したらしく云ひ出した。

が、奥さんがかう云つた時、いつもなら「そんな事はうっかり云ふもんぢやない」と擔いでゐるやうに制する先生は、どう云ふつもりか唯じいつと窪んだ眼の底から檢視するやうに奥さんの顔を視つめてゐた。さうして「うむ。俺もさう思ふよ。」と云つた。

「本當にお運がい、ですよ。先日元とのお宅の前を通つて見ましたがね。どうも草の生へたのにはおどろきました。それや實に大した生へ方なんです。私のこの邊までも延びてますかね。」ドクトルは乳のあたりに平たくした手をあて、云つた。「どうも草にあつちや敵はない。とつく／＼思ひましたね。」

「まつたく草にあつちや敵はない。結局何者の上にも草が生へて行くんだ。」ドクトルの云ひ振りに苦がい微笑を洩らし乍ら先生も云つた。

念のために一度リチネを飲んで見る事をす、めて、その様子次第で少し食事を進めてもよか

らうと云ひ置いて歸つたドクトルとすれちがひに、ひよつこり愛知がやつて來た。

「何です。先生、御病氣なんですか。」

大きな聲で云つて、今寝かけてゐる處だからと奥さんに手で制せられた愛知は、しかしちらつと先生の寝顔を見ると急に顔を曇らして、「どうしたんです。ひどく衰弱されたぢやありませんか。」と云つて、奥さんが又、どうも今度は變に氣になると、少し大袈裟に氣を揉むで見せると

「は、そんな馬鹿な事があるもんですか。」と笑つたが、手つ取り早い彼はすぐ醫者の事を八ヶ間しく云ひ出して、

「今すれちがつたあの八字髭の男ですか。あんなんぢや駄目ですよ。醫者はかりは贅澤にしなかつちや。こつちよ、僕が一つAさんに頼んで見ませうか。早速。」

それでさへ實は既に遅く、A博士が来るやうになつたその夜の晩方からであつた。先生の病狀がぐらつとわるくなり出して熱が上り、殆んど七轉八倒の激痛が襲ふやうになつた。應急の注射で兎も角一時痛みを鎮めた博士は次ぎの間に退いて、病氣は急性の腹膜炎で全く絶望とも云ひきれないが、兎も角重態だと宣告した。

實に晴天の霹靂はこの事であつた。寢耳に水をかけられた自分達は唯固唾を呑んで祈つた。激痛の發作はそれから三日三晩つゞいた。容赦なく書齋から聞えてくる苦悶の唸り聲を聞いては地獄に居る如き思ひをし乍らも、この假り寢のやうな病氣のためにあの先生が死んで了ふ。……そんな事はどうしても有り得る事とは吾々には想像し得なかつた。

それでも注射で一しきり苦悶がしづまると、先生は嵐の後の空のやうに朗らかな顔に見える事が多かつた。

「御氣分はいかゞ。少しはおよろしくつて？」

息をつきに奥へ来ては「どうしたらいいでせう。塚元さん。……あたし……そんな事になつたら……」と泣きくずれた後に、まさかそんな馬鹿な事がと、いくらか勵まされては苦しくその顔をぬぐつて、かう云ふ奥さんの顔をまともには見ずに

「うむ。い。」と口籠るやうに、「なに、大丈夫だ。俺のやうなものは、元々長生きするやうに出来てるんだからナ。」

此の言葉は二度目であつた。

そんな事を云つた後では又すやくと斬さへかいて、一眠りすると、ぼちりと眼をあいた。

「あいつに、辰子に逢つた夢を見た。何でも俺に逢はせ度い人がゐると云ふんだ。一面に曼珠沙華の咲いてゐる廣い野原見たいな處で。そして後ろからくる人にあいつは俺を引き會はせるやうな素振りをした。俺はてつきり例の妹だナと思つてよろこんでのぞいて見ると、ちがふ。

一眼その人を見た俺は、すぐあの人だナと感づいて、その前にひれ伏しちまつた。と、何だかお前は幸福かと訊かれたやうな氣が俺はして、「はい、お蔭様で幸福であります」と俺は答へた。さうして一寸辰子を見るとあいつは手を顔にあて、泣いてゐる。俺も泣いぢまつた。

が、その人は別にそんな事を俺にたづねたわけぢやなかつたらしい。俺がふつと顔を上げた時には、その人はもうさつさと向ふへ行つてゐるんだ。」

が、そんな事を口にするそばからその額にはもう玉のやうな膏汗がにじみ出た。そして見るにもゐた、まらず、聞くにも穴にもぐり度ひほどの懊惱を呻吟とがつゞいた。身を斬られる思ひをし乍ら逃げ出すやうに氷を買ひに外へ出た自分は、太息を吐き乍ら、祈り乍ら、涙が氷のやうに堅い頬を傳つた。併し、もうこのまゝ、逝くんではないかと思はれた先生は又きれいに澄んだ眼をあいた。そしてまるで何の苦悶も舐めなかつた者のやうなすが／＼しさで「い、天氣だナ。少し空が見たい。」と云つた。

さびしい喜びが自分達の胸を涼しく通つた。自分達はそつとその蒲團を先生ごと引きすつて縁に近づけた。

拭ふやうな初夏の空には唯一片の雲がふわりと長閑に浮いてゐた。

「お、い、雲。何と云ふ軽さだらう。」そして一息ついて、「人間の心もあの位軽くなりきらないと、……溶けるわけには行かないんだらうナ。」と宙に圓を蒸がいて云つた。

「ねえ、君。癒つたら、又一つどこかに行かうね。みんなで一緒に。——いつかK——に行つたね。あの時は面白かつた。——櫻が見度い。」

先生は實際癒るものと思つてゐるらしかつた。

「行きませう。是非。」

辛じてかう答へた自分は泣きに隣りの室に逃げた。そこでは奥さんがきよとんこ圓い眼を見合はせてゐる小さい人達の前に座つて泣いてゐた。

その日の夕方、どこか遠くで祭りの太鼓が聞こえてゐた時だつた。苦しみぬいた揚句眠るが如く靜かになつた先生はいつの間にか息を引きこつてゐた。軒には籠の五十雀が啼いてゐた。

後 語

先生の死はあまりに突然であり、あまりに飽つ氣なかつた。しかしいかに飽つ氣なく、他愛なくともそれは悪夢ではなくて、儼然たる悲しい事實であつた。

もういかに聲を限りに「先生」と呼んでも應へないその安らかな顔の怖ろしい沈黙。よく物を撫でたその手の冷たさ。

「世の中の事つてもものは萬事かうしたもんですよ。かう云ふ生きてゐなくつちやならない人間が早く死んで行つて、私のやうなやくざ者に限つていつ迄も耻をさらしに生きのこつてゐるんです。」

葬式の日には又ひよつこり姿をあらはした兄さんは、けつそりこ無残な死苦の痕の歴然たる先生の顔に抱きつくやうにし乍らはふり落ちる涙を手拭ひでふきく／＼かう云つた。

だが世間にとつては先生はちつとも「生きてゐなくつちやならない人間」ではないらしかつた。むしろ全く用のない人間のやうに見えた。世間と先生との間にはたしかに一つの越え難い壁があつた。その壁は先生の方から無意識に作つてゐたものか、それとも世間が意識的に先生

に向つて立てたのか、それはわからなかつた。兎も角先生と世間とはその壁の彼方と此方とで別々に暮した。のみならずその壁はその存在に先生が意識を配つてゐる暇のない間に、ずんと高く生長し、厚くなつた。そして始めには兎も角先生の存在を認めて、文學者でも思想家でもない、矢張り中學生の「先生」が相應してゐるなぞと非難した者も、後には全く没して了つたその姿にむかつて何の云ひやうもないやうに沈黙した。

だから自分達少數の交際者にとつてかくも無限な深さを持つ淋しさである此恩人の死は、世間にとつては何の反響も齎らさないのは當然であつた。唯一つの新聞が小さくその死を報じてゐた丈けだつた。

にも拘はらず、先生は常に堂々として、和氣に充ち、悠々天地を闊歩して幸福に暮した。吾々は先生の佛のうちに孤獨なニイチエに見る如き悲壯な感じや、世を拗ねた隱遁者の如きひねくれた印象を毫もうける事がなかつた。先生はいつでも鷹揚な、まつすぐな、面白い人だつた。なつかしい人だつた。どこか淋しく見える事はあつてもその淋しさの感じには對人の意識の影は微塵も見えなかつた。この點に於て、吾々は先生を想ふ時、直ちにヒロイックな感じをうける事は出来ないにしろ、かくも「甘くない」世界認識の上に立ち乍ら、かくも牢平たる自己の

幸福を獲得し、體現する上に於て、先生はたしかに一種の英雄であつたと信ずる者である。

自分はこの書を書き上げて、先生の靈前に捧げる勇氣に躊躇するものである。此書を書き上げた今程先生を寫す事の不可能を感じた事はないからである。唯あの先生の靄々たる顔を想ふ時、自分はこの拙劣なポートレートをでも先生が香氣によるこんでうけてくれ相な氣になる。だから自分はこだはらずに一方氣を樂にして、淋しい奥さんの慰めのためにでも兎もあれこれを公けに見やうかと考へる。尤も自分は此書を以て敢へて世に問はうとも思はない。すぐれたる者は必ず世に遇はずとは自分は断定はしまいかれども、先生の有つてゐるた如き價值が或る年數を経て必ずいつか世に歡ばれるものとも亦信じ難いからである。自分は決して拗ねた感情に於てさう云ふのではない。唯現世の約束が必しもさう整然と出來たものとは思へぬのである。而して又自分はその點を強ひて先生のために嘆けかうとも思はない。先生は既に自分の價值を自ら充分に享樂しぬいた人である。先生の幸福は即ち先生の價值そのものであつた。この意味に於て、「幸福は徳の報酬ではなく、徳そのものである」と云ふ言葉を身を以て體現した先生に云ふ個人は、畢竟それで瞑して、のたと信ずる。先生が瞑すると否とにとつてその他の報酬は「煙草の煙りにも足らぬ」偶然のお景物にすぎない。

1939. 11. 2
1941. 5. 24.
1959. 4. 13

半靴を穿いて帽子を阿彌陀にかぶり、春夏秋冬の自然の前に恭しく三寶禮をする先生の姿。
月を見ては、花を見ては思ひ出さる、その莞爾とした無心な面持ち。

先生は事實幸福な人であつた。それ故に自分達も亦先生を「幸福な人。何者と雖も動かす事の出来ない幸福をつかんだ人であつた。」と、さう信ずればそれで足るのである。

一九二四年二月起稿
一九二五年八月二日擱筆

1939. 2. 9



大正十四年十月三十日印 刷
大正十四年十一月三日第一刷發行

竹澤先生と云ふ人
定價二圓五十錢

著者 神奈川縣鎌倉町 塚ヶ谷 長 與 善 郎
發行者 東京市神田區南神保町十六番地 岩 波 茂 雄
印刷者 東京市牛込區榎町七番地 本 間 十 三 郎

日清印刷株式會社

發行所

東京市神田區南神保町十六番地

岩波書店

電話四谷(五八七)番
振替東京二六二四〇番

2127

- 冬の 日抄露伴學人著 送二料四十八錢
- 芭蕉七部集定本 勝峰晋風著 送二料四十八錢
- 芭蕉俳句研究 幸田・沼波・太田・阿部 安倍・小宮・和辻 著 送二料四十八錢
- 續芭蕉俳句研究 幸田・沼波・太田・阿部 安倍・小宮・和辻・勝峰 著 送二料四十八錢
- ^{一茶}遺稿 父の終焉日記 東松露香校訂 送八料十四錢
- 漱石俳句集 夏目漱石著 送一料三十六錢
- 漱石俳句研究 寺田寅彦・小宮豐隆 松根豐次郎 著 送二料二十八錢

岩波書店

~~544~~ F/3
~~165~~ N25
6a

終

